幸せのカタチ

小桜ひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幸せのカタチ

【Ｎコード】
Ｎ２１６１Ｉ

【作者名】
小桜ひなた

【あらすじ】
極道一家に生まれてしまった少女が、友情や恋、様々な出会いと別れを通して成長していく姿を描いていきたいと思います。
舞台は現代で、日常を描いてはいますが、ある種のファンタジーです（人物造形など）。リアルな物語をお求めの方にはご期待にそえないかと・・・。
前半はほのぼの、後半はシリアスになる予定です。
後々、暴力描写や死んでしまうキャラが出てくる予定ですので、苦手な方はご遠慮ください。

また、大団円のハッピーエンド・・・とはならないと思いますので、
完全なハッピーエンドでなくちゃ嫌、という方もご遠慮ください。

1. 黒羽組（1）

1. 黒羽組

人は誰しも、生まれる場所を選べない。
もっと裕福な家に生まれたかった、優しいお姉ちゃんが欲しかった、仲の良い両親のもとで育ちたかった――決して叶えられぬと分かっていても、何かを望んだことがあるだろう。
何の不満もない、この家庭に生まれてきて良かったと、生涯心から思い続けることの出来る幸せな人もいるかもしれない。
現在十五歳の黒羽雪乃が望んだのはただひとつ、“普通の家庭”に生まれることだった。
“普通”という言葉ほど曖昧なものはない。その定義は人それぞれ微妙に違うものだ。
雪乃が“普通じゃない”と思っている雪乃自身の家庭も、人によっては“普通”に見えるのかもしれない――もしそんな人がいるのなら、是非とも会ってみたいと雪乃は思うのだが。
二千坪を超える敷地に、大きな平屋が建っている。築百年以上になる古い日本家屋だが、上質な木でしっかりと造られている上に補修も万全で、庭の木々も手入れが行き届き、年月の重みと共に気品すら漂っている。
それだけでもある意味“普通”ではないのだが、雪乃が思う“普通じゃない”のはその先だ。
その立派な家屋には常に、いかつくて柄の悪い男達が二十人以上も出入りしている。そして、基本的に礼儀というものを知らぬ彼らが、雪乃を見かける度に恭しく頭を下げるのだ。
雪乃には母親はいない。姉妹も兄弟もいない。三十三歳の若い父

親と、十八歳と十四歳の少年と四人、敷地内の端っこに建てられた、外観だけはごく普通の一軒家に住んでいる。

こちらは築十年にも満たない、比較的新しい住居だ。一階には十八畳のリビング、ダイニングキッチン、六畳の和室と洋室がひとつずつ、それにトイレとバスがあり、二階には、六畳と十畳の洋室がひとつずつ、そしてリビングと同じくらいの大きさのバルコニーがあった。

雪乃の部屋は二階の北東にある六畳の部屋で、午後になるとほとんど日が入らなくなるので、南に面したその広いバルコニーに出て、本を読んだり、勉強をしたり、ぼんやりしたり、うとうとしたりすることが多かった。

晴れた日は、昼から夜へと変わる時間、いわゆるマジックタイムの神秘的な美しい空を眺めるのが好きだった。

二階のもうひとつの部屋は父の竜治、一階の和室は十八歳の大和、洋室は十四歳の優の部屋になっている。

大和も優も、竜治が連れてきた少年だ。大和はもう七年も一緒に暮らしている。優は一年ほど前にやってきた。

1．黒羽組（2）

大和と初めて会ったのは、雪乃が八歳の時だった。竜治と二人の生活が始まって一年ほど経ってはいたが、雪乃はまだその暮らしに完全には馴染めておらず、自分のことだけで精一杯だった頃だ。最愛の母の死を受け入れることも出来てはいなかった。

「今日から一緒に暮らすことになった大和だ。仲良くな」

突然そう言われ、雪乃はポカンと口を開けたまま、竜治に肩を抱かれている大和を見つめていた。

大和は何も言わなかった。その視線は自分の足元を見つめたままで、右手で左の二の腕の辺りをギュッと掴み、小さく震えていた。

「大丈夫。もう大丈夫だ。今日からここがお前の家だからな」

竜治が右手に力を込め、大和の身体を抱き寄せた。

「ッ……」

大和の口から小さな声が漏れ、眉根がギュッと寄せられた。

「ああ、悪い悪い。痛かったな……まずは風呂に入って、身体をキレイにしよう」

竜治のその言葉に、雪乃は無意識に大和の全身を見ていた。

まだ肌寒い四月なのに、半袖のTシャツに膝丈のパンツを穿いていた。細すぎる腕と脚に、いろんな色の痣やカサブタが出来ていて、新しい血の跡もあった。

改めて顔に目を戻すと、口の横と目の下に痛々しい傷があり、髪もボサボサに汚れていた。

雪乃は急に心臓がドキドキしてきて、慌てて目を背け、黙って階段を駆け上がり、そのまま自分の部屋に入って鍵をかけた。鍵がついているのは知っていたが、かけたのは初めてだった。

そのままその場に座り込み、目をギュッとつむって、さっき見た少年の姿を追い払おうと必死に頭を振った。けれど、そうしようとすればするほど、まざまざと甦ってきてしまった。

その時の雪乃は、少年の痛みに同情するよりも、ただただ怖いという気持ちの方が強かった。

1．黒羽組（3）

どのくらいそうしていたのかはわからない。扉を軽く叩く音がして、雪乃はゆっくりと目を開け、立ち上がって鍵を開けた。
「……何が怖かった？」
竜治は優しく微笑みながら、囁くような声で言った。
「……わからない……」
消え入りそうな声で雪乃が答える。
「大和のことが、怖いか？」
雪乃は一瞬の間をおいて、首を横に振った。
「大和の怪我が、怖いか？」
また少しの間をおいて、今度は頷く。
怖い人なら母屋の方に沢山いる。そんな人たちと大和は同じじゃない。
大和を見た瞬間、綺麗な男の子だな……と雪乃は思ったのだ。傷だらけの身体も、ボサボサの頭も目に入らずに。
雪乃が怖れたのは、その傷――どうしてあんなにも全身が傷だらけなのか……その理由を知るのが怖かったのだ。
「雪乃」
優しい、それでいて力強さを含む声で呼ばれ、雪乃は竜治の目をじっと見つめた。竜治はしゃがんで雪乃と目の高さを合わせ、その両肩に手を乗せた。温かい体温が、雪乃の身体にじんわりと伝わる。
「あの子は、とっても傷ついてる。身体だけじゃなくて、心も、だ。パパの言ってること、わかるか？」
雪乃は泣きそうな顔で頷いた。
「何もしなくてもいい。ただ、一緒に暮らしてあげてくれないか？」
雪乃の脳裏に、俯いて震える少年の姿が甦った。
「……雪乃がどうしても嫌なら、あっちの家に住んでもらうことにするけど……」

「……わかった」
小さな声で雪乃は答えた。
「……あっちじゃ、かわいそうだもん……こわいおじさん、いっぱいいるもん……」
大粒の涙を零しながら言う雪乃の頭をグシャグシャと撫でながら、竜治は「ハハハッ」と笑った。
「偉いぞ、雪乃。お前は優しい子だ」
竜治はそう言ったが、雪乃自身は自分が優しい子だったとは思っていない。それから数ヶ月の間、大和に声をかけることすら出来なかったからだ。

1．黒羽組（4）

毎朝起きて一階に下りると、大和は既に台所にいた。竜治の作ったお世辞にも上手いとはいえない料理を皿に盛り付け、並べるのがその頃の大和の仕事だったようだ。

雪乃に気づいた竜治が「おはよう」と言い、雪乃も小さな声で「おはよう」と答える。大和は雪乃とは目を合わせずにペコリと頭を下げるだけで、雪乃も同じように返すだけだ。

大和の目に雪乃が映ることはなかった。だから、雪乃が小さく頭を下げていたことも知らなかったかもしれない。

大和は喋らず、笑わなかった。朝食のテーブルで話すのは竜治ばかりだった。

けれど竜治は、雪乃にも大和にも、話すことを強要したりはしなかったし、愛想の無い二人に腹を立てることもなく、いつも上機嫌で自分の話したいことを話していた。

朝食が終わると、雪乃は学校へ行った。大和は行かず、掃除や洗濯など、家のことを手伝っているようだった。

時々、リビングのテーブルで、竜治が大和に勉強を教えているのを見ることがあった。

「よし、今日から四年生のドリルに進むぞ」

そんな竜治の声が聞こえた時、大和は小六だと聞いていた雪乃は不思議に思ったが、それを訊ねることはしなかった。今なら、何らかの事情でちゃんと学校に通わせてもらえなかったのだろうとわかる。

しばらくすると、朝食と夕食に、大和の作ったおかずが並ぶようになった。見た目も味も、どんどん良くなっていくのが雪乃にもわかった。

「お前、才能あるぞ、大和」

肉じゃがの芋をホクホクと頬張りながら竜治が言った。

「なぁ、雪乃。この肉じゃが、めちゃくちゃ美味いよな」
言われた雪乃もじゃがいもを口に入れ、ゆっくりと味わってから飲み込んだ。
「……うん。すごくおいしい……やさしい、味がする……」
「お前、どこでそんな言い方覚えたんだ？」
竜治が声を上げて笑い、雪乃がはにかむと、大和もクスっと笑った。竜治と雪乃が思わず大和の顔を見つめると、その顔から笑みは消えてしまった。
けれど、以前の怯えたような顔ではなく、どこか恥ずかしそうな、戸惑ったような顔で俯いている。竜治は優しく微笑み、雪乃の方をチラリと見た。その時の竜治の嬉しそうな顔を、雪乃は今でも覚えている。
それから少しずつ、大和は心を開いていったように思う。雪乃もまた同じように。

1．黒羽組（5）

大和の笑う顔が見たくて、雪乃は積極的に「おいしい」と口にするようになった。それはお世辞ではなく、心から思っていることだった。大和ははにかむような微笑みで応えてくれた。

大和の作るものは、いわゆる家庭料理といわれるものがほとんどだった。随分後で知ったことだが、竜治が大和に渡した料理の本たちは、雪乃の母が使っていたものだった。

そんなある日、学校から戻った雪乃は、バルコニーにいる大和に気がついた。

それまでも、洗濯物を取り込んでいる大和を見かけたことは何度かあって、見上げる雪乃に気づいた大和の方からペコリと頭を下げてきていたのだが、その時の大和はどこか様子がおかしかった。

いつまでたっても雪乃に気がつかない。何も持っていない両手をブラリと下げ、どんよりとした薄暗い空をただ見つめていた。

雪乃は家の中に入り、数分の間迷ってから、意を決したようにバルコニーへと向かった。

「な……なにしてるのッ！！」

突然の大きな声に、大和は驚いた顔で振り返った。

「あ……す、すみません……」

頭を下げてその場を去ろうとする大和を、「待って！！」と雪乃は呼び止めた。

「違うの……えっと……わ、私の、私の顔を見て！！」

言われていることの意味がわからず、大和は怪訝そうに眉根を寄せ、雪乃を見つめた。

雪乃はゴクリと唾を飲み込むと、大和の目をじっと見つめ返した。大和の目が左右に泳ぎ、ついには下を向いてしまう。

「ダ、ダメッ！！　ちゃんと、見てて……目を、そらしちゃ、ダメだからね……」

雪乃の言葉に、大和がおずおずと視線を上げる。
「……いい？　ちゃんと、見ててよ……？」
そう念を押すと雪乃は、大きな目をさらに大きく見開いた。驚いた大和の目も、つられて大きく見開かれる。
雪乃の少し茶色がかった黒目が、ゆっくりと中央に寄り始めた。それを見ていた大和の口がポカンと開く。
左右の黒目が中央でくっついたと同時に、雪乃は口の中に思いっきり空気を溜めて頬をパンパンに膨らませ、両耳を手で思いっきり引っ張った。
寄せた黒目が離れないよう、必死で自分の鼻を見つめる。だんだん目がクルクルと回ってきて、頭もボンヤリしてきたが、必死にその顔を保とうとした。
やがて、「プッ……」と大和が噴き出すのが聞こえると、雪乃は耳から手を離し、目を閉じてフゥ……と息を吐いた。心臓がドキドキいっていた。
目を開けると、大和が笑っていた。身体を折り曲げて、声を上げて、楽しそうに笑っていた。そのうち涙を流して、泣き笑いの顔になった。
「……大丈夫？　目、痛くない？」
目尻の涙を指で拭いながら、大和が言った。
「だ、大丈夫！！　……ちょっと、痛いけど」
雪乃も笑い返す。
「はやってるんだ、学校で……ヘンな顔するの！！」
一瞬浮かびそうになった寂しさを追いやるように、雪乃は満面の笑みを浮かべた。
「……ありがとう……」
優しい目で、優しい声で言う大和に、雪乃は微笑みながら頷いた。

1．黒羽組（6）

翌朝一階に下りた雪乃は、いつものように竜治と大和に「おはよう」と言った。

最近は小さな声で「おはよう……」と返してくれるようになっていた大和だが、その朝は少し様子が違った。

真っ直ぐに雪乃を見つめ、「おはようございます、お嬢」と言ってから、頭を下げ、そして笑顔になった。

雪乃は呆気にとられ、その場に立ち尽くした。

「これからは、お前を守るために強くなるんだと」

竜治が愉快そうに言った。雪乃はまだポカンとしたままだ。

「そのためには、まずはしっかり食わないとな。お前、食細すぎだぞ。このままじゃ、雪乃の方がでっかくなっちまう」

竜治の言葉に、大和が笑っている。状況は呑み込めていなかったけれど、それが嬉しくて、雪乃も一緒に笑っていた。

それから大和は、雪乃に沢山話しかけてくるようになった。雪乃の方も、自分がこんなにもお喋りだったのかと驚くほど、大和に沢山の話をした。

竜治にも大和にも黙っていたが、雪乃には友達がいなかった。友達どころか、ただ挨拶を交わす相手すら、学校にはいなかった。

みんな知っていたからだ。雪乃が黒羽組の、百年以上も続く極道一家の娘であることを。

自分が忌み嫌われていること、恐れられていることを雪乃は理解していた。だから、自分からもみんなに近づかないようにした。出来るだけみんなに迷惑をかけないよう、息を潜めていた。

極道がどういうものなのか、母に教えられていた。人様を苦しめ、世間から後ろ指さされる存在だと知っていた。もちろん、母はそんな難しい言葉は使わなかったけれど。

みんなが悪いのではない。悪いのは自分だ。そういう家に生まれ

てしまった自分。だから嫌われても仕方が無い。独りぼっちでも仕方が無い。

これからもずっと、独りなのだ……と雪乃は思っていた。

けれど、それは違ったのだ。家に帰れば大和がいる。そう思うだけで、学校にいる時間がずっと楽になった。

「“お嬢”って呼ぶのやめて。雪乃でいいから」

何度か大和にそう言ったが、「それはお嬢を守るっていう、俺の決意の表れですから」と言って、聞いてはくれなかった。今はもう諦めて受け入れている。

組の者たちは全員、雪乃のことを「お嬢」と呼ぶ。それがとても嫌だった。なのに、大和に言われるのはまったく嫌じゃないのが不思議だ。何だかくすぐったくて、胸の辺りが温かくなる感じがする。

大和は中学は卒業したものの、高校へは進まなかった。料理の腕はますます上達し、和食、洋食、中華とレパートリーも増えた。

竜治について出かけることも多くなった。どこへ行くのか、何をしているのか、雪乃は怖くて聞けなかった。

今も、何をしているのか知らないし、ここに来る前に何があったのかも知らない。

けれど、そんなことはどうでもよかった。毎日大和が傍にいる。一緒にいる。それだけで、雪乃は心が安らいだ。

優が来た時も、大和と同じような状態だった。大和のように身体に傷があるわけではなかったけれど、心に傷を負っているのは雪乃にも一目でわかった。

もしかしたら、大和より酷い状態だったかもしれない。

1．黒羽組（7）

優の顔は、不安そうにも、怯えているようにも見えなかったし、身体もまったく震えていなかった。

その顔には、何の感情も浮かんでいなかった。何にも関心を抱かない、何もかもを諦めたような冷たい目。抜けるように白くなめらかな肌、完璧な顔立ちと相まって、命の無い人形のように見えた。

「よろしくね」

雪乃は笑顔で声をかけた。けれど、優は何も言わず、何も無い宙をじっと見つめているだけだった。

大和の時のように、まずは竜治が風呂に入れようとすると、「一人で入ります」そうキッパリと言った。無機質な、感情の感じられない声だった。

大和が連れてこられた時、何も出来なかったことが心残りだった雪乃は、優には何かをしたいと強く思っていた。一つ年下ということもあり、雪乃はお姉さんのような気持ちで積極的に優に声をかけた。

話しかけると、優はしっかりと受け答えをした。けれどそれはいつも事務的で、雪乃は自分が酷く嫌われているような気持ちになった。

「誰も信じてないんだ」

ある時、竜治が呟くように言った。雪乃も大和も、優のことを言っているのだとわかったが、何も訊かずに黙っていた。

信じられる人が誰もいない――それはきっと、とても辛いことだ。

信じてもらうにはどうしたらいいんだろう……と雪乃は考えた。優に信じてもらいたい。傷つけたりしないことをわかってほしい。

雪乃は母を信じていた。母はいつも雪乃のことを思ってくれていた。叱られたこともあったけれど、いつも雪乃が喜ぶことをしようとしてくれた。

父のことは、最初は信じていなかったかもしれない。けれど、毎日一緒に過ごすうちに、やっぱり父も自分のことを思ってくれているのがわかった。

大和も同じだ。いつの間にか、意識なんてしたこともなかったけれど、気づけば心から信じている。

きっと、そういうものなのだ。信じてもらうために何かをしたって駄目なのだ。

その人を大切に思う気持ち、それは少しずつ、時間をかけて相手に伝わる。そのことに相手が気づいてくれた時、信頼は生まれているものなのだ。

その時間は、人それぞれに違うものだ。自分に出来ることは、優を大切に思い続けること――雪乃はそう答えを出した。

1．黒羽組（8）

「おぅ、おはよう雪乃」
「おはよう。大和も、優も、おはよう」
「おはようございます、お嬢」
「おはようございます、お嬢さん」
エプロンをした大和がフライパンを手にしたまま笑顔で応え、制服を着た優は皿を並べる手を止めてお辞儀をした。
テーブルの上には、冷ますために蓋が外されたお弁当が四つ並んでいる。天然杉で出来た、曲げわっぱだ。大きいものが二つ、それより一回り小さいものが二つ。
優は食が細い。来たての頃の大和は精神的なものが原因で食欲を失っていたが、優は元々少食のようだった。見るからにやつれていた大和とは違い、色白ではあるが肌艶は良いし、細さも病的な感じはしない。
「少食の方が長生きするらしいぞ」
大和には「もっと食え」としきりに言っていた竜治が、優にはそう言った。確かにその説は、雪乃も新聞で読んだことがあった。
「長生きなんかしたって……」
思わず口に出してしまった、という風に優はそこで口をつぐみ、慌てて別の用事に取り掛かり始めた。
その時、竜治の口元がほんの少し緩んだのを、雪乃は見逃さなかった。優が少しずつ心を開き始めているという兆しだと思った。
「あ、豆御飯だ！！」
わっぱの半分を占めるグリーンピースご飯を見て、雪乃が嬉しそうに言う。
「俺はあんまり好きじゃねーんだけどなぁ」
竜治はわざと口を尖らせてそんなことを言う。
「大人なのに好き嫌いがあるなんて恥ずかしいよ。ね、大和も優も

そう思うでしょ？」
大和と優はチラッとお互いを見て、それから困った顔になった。
「何よー。大和は大人になったらピーマン食べられるようになるよね？　優は納豆食べられるようになるよね？」
それぞれの嫌いな食べ物の名前を出すと、大和も優も眉を顰めてウエッという顔をした。
「んじゃ、お前もニンジン丸かじりしろよ？　もちろん生でな。あ、あとニンニクもな。あれは生で食うと腹壊すからな、焼いて食え、丸ごと」
イヒヒ、と意地の悪い笑いを浮かべて竜治が言う。
「あのね、グリーンピースとニンジンやらニンニクやらを一緒にしないでよね！！　全然違うじゃない！！」
「それはニンジンのセリフだろ。あんなに甘くて可愛い子が、何でこんな緑色のクサイ奴と一緒にされなきゃならないんだ。しかも噛むとプチッとして、中からうにょーんて出てくるぞ」
「枝豆は大好きなくせに。それにイクラだって」
「何でイクラが出てくるんだ」
「プチッとして、うにょーんじゃない」
「あれはプチッとして、じゅわーだろ」
「何か生臭くなってきた……」
雪乃は眉を顰め、鼻の穴をヒクヒクさせた。
「はいはい、仲良しさんはそのへんにして、早く食べないと遅刻しますよ？」
大和に言われテーブルを見ると、すっかり朝食の支度が整っていた。
バターのたっぷり染み込んだトーストに、カリカリに焼いたベーコン、黄身が半熟の目玉焼き、プチトマトに茹でたブロッコリーという、洋風朝食の定番だ。
日によって――主に雪乃のリクエストによる――ご飯にお味噌汁、焼き魚や焼き海苔、漬け物などの和食の定番メニューのこともある

し、朝からバナナと生クリームとチョコレートたっぷりの三段ホットケーキの時もあった。
「おい、雪乃、ソース取ってくれ」
「……あのさ、目玉焼きにソースかけるのやめてくれない？　気持ち悪いんだけど」
「人の好みに向かって気持ち悪いとは何事だ。そういうものは、尊重しないといけないんだぞ？　ほら、早くとってくれないと、ケチャップもかけちゃうぞ？　んで、グチャグチャにかきまぜてだな――」
溜め息を吐きながらソースのボトルを渡すと、竜治はドボドボと目玉焼きにソースをかけた。雪乃は信じられないという風に首を振り、自分の目玉焼きに塩をかけた。
「はい、優」
「ありがとうございます」
塩の瓶を渡す時に指が触れ、雪乃はほんの少し動揺したが、優はまったく気にしていないようだった。
「はい、大和」
雪乃の真似をして気持ちの悪い声を出しながら、竜治が大和にソースのボトルを差し出す。
「あ、いや、俺は、いつも醤油で……」
「俺のソースは食えないってのか？　ん？」
「……いただきます」
目の笑っていない笑顔で言われ、大和は渋々ソースをかけた。
「……醤油も変だよ、大和。ご飯ならともかく、パンだよ？」
「お前はほんと、いちいちうるさいな。口うるさい女はモテねーぞ？」
ソースまみれの目玉焼きをトーストに乗せながら竜治が言う。それを見た大和の眉根がかすかに寄せられた。やっぱり目玉焼きには醤油だ、と心の中で思う。
「パンって結構、和食と合うんですよ。味噌汁とか。食パンに、納

豆と海苔乗せて焼いても美味いですし……」
大和の言葉に、トーストを口に運ぼうとしていた優の手が止まった。あからさまに不愉快な顔をして固まっている優に、三人の視線が注がれた。
大嫌いな食べ物と、今まさに口に入れようとしている食べ物が合体したところを想像すれば、誰でも食欲が失せる。
「悪い、優……忘れてくれ」
大和が謝ると、優は小さく息を吐いた。
「……じゃあ、何か美味しそうなものの話してください」
意外な返事に三人は一瞬顔を見合わせ、それからそれぞれの頭の中で考えを巡らせた。
最初に口を開いたのは雪乃だった。
「優はケーキが好きなんだよね」
言われた優は、きょとんとした顔で雪乃を見つめた。てっきりそれぞれが好きなものについて熱弁をふるい出すと思っていたのに、誰にも話していない自分の好きなものをズバリと当てられて驚いたのだ。
「そうなのか？」
竜治の問いに、優は少し間をおいてからコクリと頷いた。
「大和は知ってたか？」
「いいえ」
「んじゃ、雪乃にだけこっそり教えてたってわけか」
「……言ってません」
優のぶっきらぼうな言い方に、雪乃の顔から笑顔が消えた。
食卓に沈黙が流れる。
「……バレちまったなら仕方ない。実は雪乃には、生まれつき超能力があるんだ。相手の好きな食べ物がわかる、ってだけの、ショボーイ能力だけどな」
竜治がおどけて言うと、大和が「アハハハッ」とわざとらしい笑い声をたてた。

しかし、雪乃と優には効果が無い。困り顔の大和の目に、壁の時計が映った。
「あ、お嬢、あと五分で出ないと、電車に乗り遅れますよ」
大和に言われて時計を見た雪乃は、慌ててパンやらベーコンやらを口に入れ、オレンジジュースで流し込んだ。
「ちゃんと噛まないと、後でポンポン痛くなるぞー」
という竜治の声は無視し、雪乃は優の方を見た。
「……もう行ける？」
優は「はい」と答え、最後のプチトマトを口に入れた。
「あ、弁当、忘れるところでした」
大和は急いでわっぱの蓋を閉め、雪乃の分は淡いピンクの小花柄、優の分は紺と白の細いストライプ柄の弁当袋に入れ、それぞれに渡した。
「ありがとう。いってきます」
「いってきます」
「いってらっしゃい。気をつけて」
「おぅ、今日も勉学に励んで来いよー」
大和と竜治に見送られ、二人は揃って家を出た。

1．黒羽組（9）

玄関を出ても、すぐに道路に出られるわけではない。
広大な敷地は、生け垣とコンクリートの塀にぐるりと囲まれていて、門に辿り着くまでに母屋の前を通らなければならなかった。
「いってらっしゃいませ、お嬢」
形だけは丁寧に、男達が上半身を倒す。雪乃はペコリと頭を下げると、逃げるように足早にその場を通り過ぎる。
門のところにも左右に一人ずつ男が立っていて、雪乃にとってはそこが最後の関所だった。
やっと道路に出ると、自然と長い溜め息が漏れた。一歩後ろからついてきていた優をチラリと見ると、疲れきった雪乃とは対称的に涼しい顔をしていた。
「少し早足で歩くけど、いい？」
優と一緒に行けるのは、ほんの五分ほどの距離だ。そこから優はそのまま歩いて中学校に向かい、雪乃は駅に向かって電車に乗る。優と別れてから走るにしても、ここでのんびり歩いていたら乗り遅れそうな時間だった。
優は「はい」と言うと、早足で歩き始めた。雪乃は慌てて後を追う。身長は雪乃の方がほんの少し高いのに、脚は優の方が断然長い気がする。
「……さっきは、ごめんね？」
恐る恐る、優の背中に声をかけた。
「何のことでしょう」
本当にわからないのか、フリをしているだけなのか、優の表情は見えないのでわからない。たとえ見えていたとしても、わからなかったと思うけれど。
「余計なこと、言っちゃったから……」
「ケーキのことですか？」

雪乃は「うん」と頷いた。
「お嬢さんも、男のくせにケーキが好きだなんておかしい、とか思ってるんですね」
「え？　ううん、思ってないよ、そんなこと、全然！！」
「だって、だから謝ったんじゃないんですか？　ボクに恥をかかせた、って」
「そうじゃない。そんなこと考えてもみなかったよ……」
「じゃあ、どうして謝ったんですか？」
「それは……」
優がケーキ好きだということを、誰かから聞いたわけではない。ただ、何度かみんなでケーキを食べた時、いつもより優の顔が少しだけ嬉しそうに見えたから、きっと好きなんだと思っていたのだ。
優はほとんど感情を顔に出すことはしないから、それは本当に小さな変化で、じっと見ていないと気づかないことだった。
じっと見る……つまり、優の知らないところで、優のことを観察していたことになる。もしかしたら優は、監視されているような不快感を覚えたかもしれない。だから雪乃は謝ったのだ。
そのことを正直に話したが、優は黙ったまま何も言ってはくれなかった。
「じゃ、じゃあ、私はこっちだから……」
わかりきっていることなのに、雪乃は駅の方角を指差しながら言った。
「――あの」
走り出そうとした雪乃を、優が呼び止めた。
「謝る必要なんてないです……謝らせてしまって、ごめんなさい」
優はペコリと頭を下げると、雪乃に背中を向けて走り出した。
その後姿を、雪乃はポカンと見つめていた。てっきり気を悪くしてしまったと思っていたのに、どうして優が謝るのだろう……眉間に皺を寄せて、雪乃は首を傾げた。

優はケーキが好きだ。美味しいから、という理由だけではない。
時々母が持って帰ってきた小さなケーキの数々が、苦痛でしかない毎日の中で、宝物のようにキラキラと輝いて見えた。
それが、竜治が母に差し入れたものだと知ったのは、ずっと後になってからだった。
母はケーキが嫌いだった。けれど、竜治にそんなことを言えるはずもない。母は、黒羽組が経営している風俗店で働いていたからだ。
ケーキをもらった日は、近所の公園のブランコに座って、月明かりの下で独りゆっくりと味わった。アパートに戻ればあいつがいるから。あいつにはケーキの美しさなんてわからない。それに――。
ケーキを見つめ、ケーキを食べている間だけは、現実を忘れることが出来た。そして何より、母が自分にケーキを持ち帰ってくれた、忘れられていなかったということが、優をほんの少しの間幸せにしてくれた。
雪乃が自分を見ていたことになど、まったく気がつかなかった。どんな顔をして食べていたのだろう、どんな顔を見せていたのだろうと思うと、何だか胸がざわざわとして落ち着かない。
自分の知らないうちに、表情まで観察されていたなんて、あまり気分の良いものではない――はずなのに、不愉快さとはまったく別のよくわからない感情が、優の中に生まれていた。
誰かが自分の好きなものを知ってくれている……それも、自分で言ったわけではないのに。
それは、優には初めて経験だった。

1．黒羽組（10）

「ほら雪乃、野菜ばっかじゃなくて、肉も食え、ほれ」
雪乃の持つ皿の上に、竜治がこんがりと焼けた分厚い牛肉を次から次へと積んでいく。
「ちょっとやめてよ、こんなに食べられるわけないでしょ！？」
「オレが食うッス！！」
ツンツンに立った髪を金色に染めた若者が、自分の皿と箸を持って、ニコニコと雪乃を見つめている。
「あ、うん……どうぞ」
雪乃は彼――梁川順平に皿を差し出した。
「イタダキマッスル！！」
順平は嬉しそうに言って、大きな口に肉を次々放り込んだ。
「お前は肉ばっか食いすぎだ。さっき生焼けのヤツ食ってたろ？ちゃんと見てたんだからな」
竜治に言われ、順平は慌てて口の中の肉を飲み込んだ。
「平気ッス！！　オレ、胃腸は丈夫ッスから！！」
「ほぉ……なら、トウモロコシ、芯ごと食ってみろ。ほれ」
「そりゃ無理ッスよ。歯は弱いんで」
冗談ではなく、順平は真面目に答える。
順平は二年前、二十歳の時に幹部の上條に連れられて黒羽組にやってきた。上條と兄弟盃を交わし、普段は彼についているが、大和のことを「アニキ」と呼んで慕っている。
年に一度か二度、夏にだけやっていたバルコニーでのバーベキューが、毎月第一日曜日の恒例行事になったのは、優が来てからのことだ。もちろん決めたのは竜治で、雪乃は正直なところ、冬の間は勘弁して欲しいと思っている。
順平が参加するようになったのは、前々回からだ。雪乃がふと下を見ると、順平が恨めしげな顔でこちらを見上げていた。

竜治に言おうと思った時、
「あの！！　めちゃくちゃイイニオイで我慢できないッス！！」
という、見も蓋も無い言葉が響き渡った。
「あーん？　順平か？」
「そうッス！！　若！！　どうか一切れ、オレにも恵んでくださいッス！！」
「んなショボイこと言ってねーで、好きなだけ食え。上がってこい」
「あ、ありがとうございッス！！」
順平は、おでこが脚にぶつかりそうな勢いでお辞儀をし、大和が玄関の鍵を開けるのを待った。
順平の辞書に「遠慮」という言葉はないらしい。その他にも、載っていない言葉は山ほどあるのだけれど。
最初はただただ、沢山の肉を平らげた。二回目は、大量の牛肉と大きなソーセージを持ってやってきた。そして今回は、それに缶ビールとジュースとウーロン茶が加わっている。
「めちゃくちゃ重いッス……」
両腕にコンビニの袋をぶら下げ、両手で六本入りのビールのパックを三つ抱えて順平が言った。右腕に下げたコンビニの袋には大きなペットボトルが四本も入っていて、持ち手が腕に食い込んでいた。
その姿を見た全員が、いっぺんに持ってこなくても……と思ったが、誰も口にはしなかった。言ってもきっと、忘れてしまうだろうと思ったからだ。
雪乃は順平のことが嫌いではなかった。母屋に出入りする男達の中で、唯一そう言える人物だ。

1．黒羽組（11）

順平はとにかく明るい。素直で屈託が無い。見ているだけで、楽しい気分になる。

逆に、雪乃がもっとも嫌いな人物の一人が、順平の正式な「兄貴」である上條だった。上條は、竜治の父――現組長黒羽大門に四十年も仕えている。上條の父もまた、大門の父の側近だったという話だ。

上條とは数えるほどしか会ったことがないが、飢えに飢えた獣のような、鋭くて冷たい目を雪乃は忘れることが出来ない。一瞬思い出すだけでもゾッとするほどだ。

順平が、そんな男に仕えていることが、雪乃にはどうしても信じられなかった。もしかしたら、順平自身も違和感を持っているからこそ、大和を慕っているのかもしれない。

それでも、上條と行動を共にしているということは、雪乃が知りたくないようなことをいろいろしているのかもしれない。そう思うと、順平のことを「好き」とは言えないのだった。

雪乃が上條よりももっと会ったことがないのが、実の祖父である大門だった。数年前から大病を患い、最近は奥の間で臥せっていると耳にした。

雪乃は大門と、一度も口をきいたことがない。この家に連れてこられた日、大門は雪乃をじっと見つめ、「女などいらん」としわがれ声で言い捨て、去って行った。

それからは、偶然会うことがあっても、チラリとも雪乃を見ることはなかった。大門の世界に、雪乃は存在しない。雪乃もまた、大門を祖父と思うのはやめることにした。雪乃にとって大門は、黒羽組組長という存在でしかない。

それでもたまに思う。大病って、どれくらい酷いのだろう。週に何度も医者が出入りしているのは知っている。苦しんでいるのだろうか。寂しい思いをしているのだろうか。

もし大門に何かあったら、竜治が組長になるのだろうか……。
「いいじゃないッスかー。銭湯行きましょうよ、銭湯。ねーアニキー」
「飲みすぎだぞ。ったく、うっとうしい……」
ビールの缶を手に、順平が大和にもたれかかっている。
「アニキと裸の付き合いしたいッスよー。アニキの背中、流したいッスよー」
「気持ち悪いんだよ、このド変態が！！」
二人の様子を見ていた雪乃が、クスリと笑った。いつもと違う大和が見られるのは、何だか新鮮で面白い。
「アニキはホントかっこいいッスよねー。どうしたらそんな風にかっこよくなれるッスかねぇ……特にこの胸板、最高ッス！！」
大和の身体をパンパンと叩きながら順平が言う。
「着やせするタイプなんだ……」
いつの間にか隣にいた優がポツリと呟いた。
「優もあの二人見てたの？　笑えるよね。大和もなんだかんだで楽しそう」
「……お嬢さんも、楽しそう」
「うん、楽しいよ……優は？」
思わず口にして、雪乃の胸はドキドキした。楽しくない――そう言われたり、黙り込んでしまったりしたら、どうしよう……。
「……楽しいです」
小さな声で優は言い、ウーロン茶を一気に飲み干した。
雪乃の顔に、パァッと笑みが広がる。
「うん、楽しいよね！！　ね、デザートのケーキ買ってあるんだ。みんなまだ食べてるけど、先にこっそり食べちゃわない？　下で」
悪戯っぽく笑う雪乃に、優は小さく微笑んで頷いた。
二人は気づかれないようコッソリとバルコニーを後にした。

1．黒羽組（12）

「どれでも好きなの選んでいいよ」
雪乃が広げた箱の中には、六種類のケーキが綺麗に並んでいた。
「じゃあ……これ」
優は、スポンジとババロアの上に様々なベリーの乗った、赤くて丸い可愛らしいケーキをとった。
「ふふ、可愛いね、それ。私は……チョコにしようっと」
「チョコレート、好きなんですか？」
「うん、大好き。あ、でも、苦いのは苦手」
「ボクも。ガナッシュがいいな」
「ガナッシュ……？」
「はい。チョコと生クリームを混ぜた、甘くてフワッとしたクリームです。多分、そのケーキもそうだと思いますけど」
「へぇ……よく知ってるね。他にはどんなのが好きなの？」
「……こういう、甘酸っぱいのとか……チーズケーキも好きです」
「私も好き！！　あ、じゃあ、このチーズケーキ、二人で半分こしようか」
「でも、皆さんの分が……」
「大丈夫。ちょうど三個残るから。食べよ」
雪乃は皿を二つ出し、それぞれに一個と半分のケーキを乗せた。
リビングのテーブルで食べ始めた時、
「なーに二人でコソコソしてやがるんだ？　急にいなくなるから、誘拐でもされたのかと思ったじゃねーか」
セリフはふざけているが、半ば真面目に竜治が言った。
「自分の家にいて誘拐されるなんて、宝くじが当たるより低い確率だと思うけど……敵が宇宙人なら話は別だけど」
雪乃の言葉に、竜治の目が細められる。
「……なぁに？」

「……別に」
雪乃の口から自然に「自分の家」という言葉が出たことが、竜治には嬉しかった。
「変なの……あれ？　順平さんは？」
「バルコニーで寝てます。重いので置いてきました」
ニッコリ笑いながら大和が言う。
「風邪引いちゃうよ！？」
「大丈夫でしょう。何とかは風邪引かないって言いますし」
「一晩中ほっとくの！？」
「部屋の鍵、ちゃんと掛けとけよ、雪乃」
竜治が横から口を出す。
「酷いよみんな……」
「……すいません、お嬢。冗談です。ちゃんと後で向こうに送り届けますから、安心してください」
「上條のオッサンに怒られるんじゃねーの？　あいつに酒飲ませんのは考えもんだな」
上條、と聞いて、雪乃の顔が曇った。それだけでなく、その場の空気が一瞬にしてどんより重くなった気がする。
「ア～～～～～～ッ！！」
素っ頓狂な声が、その重苦しい空気を破って響き渡った。
「なんスかなんスかッ！！　オレだけノケ者ッスか！！　あ、ケーキ食ってるッスか！？　オレにもくださいッス！！　オレも、仲間に、入れて、ください……ッス……」
順平はそこまで言うと、突然糸の切れた操り人形のようにガクンと床に倒れ、グーグーとイビキをかきながら眠ってしまった。
「ったく、騒々しいヤツだな……」
竜治が呆れたように呟く。
「すいません、竜治さん……」
「何でお前が謝るんだよ」
竜治は大和の髪をクシャクシャと撫でて笑った。大人びた大和の

顔が、一瞬子供に戻る。
「雪乃、優、お前らはもう風呂入って寝ろ」
「ボクは、上の片付けが……」
「俺と大和でやるからいい。まだ飲み足りねーしな。子供はもう寝る時間だ」
雪乃はチラリと時計を見た。もうじき十時になろうかというところだった。
「お先にどうぞ、お嬢さん」
「いや、ダメだ。優が先に入れ。うちにはまだ、ケダモノがいるからな」
高イビキをかいて眠る順平を見ながら竜治が言う。
「雪乃、ちょっと留守番しててくれ。大和、先にコイツ運んじまおう」
「一人で大丈夫ですよ。おぶっていきますんで」
「けど、寝てるヤツは重いぜ？」
「平気です」
言いながら、大和は雪乃の方をチラリと見た。それで竜治も納得する。短い時間とはいえ、こんな時間に雪乃を独りにするのは心配だったのだ。
「そっか。んじゃ、頼むわ。雪乃、上の片付け手伝ってくれ」
「うん、わかった」
二人の思いになど気づかず、雪乃は返事をしてバルコニーへと上がって行った。

1．黒羽組（12）（後書き）

「1．黒羽組」は今回で終了です。
次回からは「2．友達」になります。

2．友達（1）

「いってらっしゃいッス、お嬢！！」
大きな声に雪乃が振り返ると、順平が両手で頭を抱えて立っていた。
「……どうしたの！？」
「大声出したら、頭が割れそうに痛かったッス……多分、昨日、飲みすぎたッス……」
「……多分、って、覚えてないの？」
「最初の一本、二本くらいは覚えてるッスけど……あ、あの、お嬢……オレ、何か失礼なこととか、してない……ッスよね！？」
すがるような、祈るような目で見つめながら順平が言う。
「うん……大丈夫……だと思うよ？」
「……なんかビミョーな言い方ッスね……けどイイッス！！　むしろ、これ以上は聞きたくないッス！！」
また大声を出し、イテテテ……と順平は頭を抱えた。
「お大事に……」
と笑った雪乃の顔が、ふいに曇った。
順平の手の甲に、丸い火傷のようなものがいくつもあった。昨日はなかったと思う。あれば気づいていたはずだ。
上條に怒られる――という竜治の言葉が耳に甦り、雪乃は不快感に軽い吐き気を覚えた。
「アッ、これは自分でヤッたっスよ？　本当ッス。自分の意志で、ヤッたことッス……」
雪乃の視線に珍しく敏感に反応し、目を泳がせながら順平が言った。
「……お嬢さん、もう、行かないと」
優の言葉に我に返った雪乃は、「じゃあ」と笑顔で言って順平と別れた。

あれはどう見ても、煙草の火を押し付けた跡だった。“自分でやった”という言葉が本当ならば、上條か或いは他の誰かが“自分でやらせた”ということなのだろう。
雪乃には、それはより残酷で卑劣な行為に思えた。
「……気にしない方がいいです」
無言で歩く雪乃に、優がサラリと言った。雪乃は少し驚いて、優の顔を見つめる。
「……向こうのことは、気にしない方がいいです」
もう一度そう言うと、優は雪乃の顔から視線を外し、前を見て歩き始めた。
向こう、というのはもちろん黒羽組のことだ。考えてみれば、組に関わらずに暮らしているのは雪乃と優だけなのかもしれない。
「……優はさ、その、怖いとか、嫌だとか、思ってるの？」
質問の意味がわからないのか、優はほんの少し眉根を寄せて雪乃の顔を見ている。
「……向こうの、人たちのこと……」
そう付け加えると、少し考えるように小首を傾げた。
「……何とも、思いません」
「えっ？」
雪乃は思わず間の抜けた声を出した。
「ボクには関係ない人たちですから」
ドライな物言いに、何故か雪乃は寂しい気持ちになった。怖いとか、嫌いとか、自分と同じように思っていて欲しかったのだろうか。
雪乃は思わずその場に立ち止まる。何歩か進んでからそのことに気づいた優が、少し困ったような顔で戻ってきた。
「……傷つけるようなことを言ったのなら、すみません……」
「え？　……あ、ううん、違うの、ちょっとボーッとしちゃっただけ。ごめんね。行こ」
小さく微笑む優の顔を見て、雪乃は先ほどの寂しさの理由を悟った。優にとって、自分や竜治や大和も「関係ない人たち」なのだろ

うかと不安になったのだ。大和はともかく、竜治と雪乃は、組とは切っても切れない関係なのだから。
一年余り一緒に暮らしてきて、少しずつ優に近づけている気がする。けれど時々、ものすごく遠くに感じることがある。
昨日はすぐ傍にいた優が、今はとてつもなく遠くにいるように思える。
ふいに、今度は優が立ち止まった。
「……お嬢さんや、竜治さんや、大和さんは、違いますから……あの人たちとは、違いますから……今はまだ、上手く言葉に出来ないですけど……」
まるで心を見透かされたような言葉に、雪乃はハッとした。それから、その言葉がじんわりと胸に染み込んできて、瞼が熱くなった。
「……早く行かないと、乗り遅れますよ」
ばつが悪そうに、優が言った。
「……うん」
雪乃は笑いながら、そう答えるのが精一杯だった。これ以上何かを言おうとすれば、きっと涙が落ちてしまうと思ったからだ。

2．友達（2）

午前中の授業には、ちっとも集中出来なかった。優の言葉と優の顔が、いっときも頭から離れてくれなくて、気づけば頬が緩んでしまっていた。

賑やかな声と机を動かす騒々しさに我に返ると、昼休みに入ったところだった。

高校に入学してひと月が過ぎていた。

男子は一人でいる人も多かったけれど、女子はいくつかのグループやペアに分かれ、一人でいるのは雪乃くらいだった。

声を掛けてくれる人はいたし、時には思いきって自分から挨拶などをすることもあった。

けれど、その後が続かない。何を話して良いのか分からず、沈黙が怖くなって逃げ出してしまう。

大和や優といる時は、話したいことが次から次へと溢れてくるのに。そして、時に訪れる沈黙が、少しも不安なものではないのに。

教室のあちこちから、楽しそうな話し声や笑い声が聞こえていた。どこかの輪の中に自分の姿があることを、雪乃はどうしても想像することが出来なかった。

独りでいることには慣れている。しかもそれは、学校にいる数時間のことだ。だから、このまま独りでも構わない。小学校も中学校もそうしてきたのだから。

だけど、本当は、ほんの少しだけ期待していた。

まだ雪乃の家のことを何も知らない人たち。いつ知られてしまうかはわからないけれど、それまででもいい、自分にも「友達」と呼べる女の子が一人でも出来たなら、と――。

雪乃は小さく溜め息を吐くと、大和の作ってくれたお弁当を持って教室を後にした。

雪乃はいつも、外のベンチで食べることにしていた。教室で食べても良いのだけれど、何となく落ち着かない気持ちで食べていたら、作ってくれた大和にも申し訳ないような気がしたからだ。
日の当たるところは他の人たちでいっぱいなので、昼時には日陰になってしまって誰も来ないベンチに座り、ひとつひとつの料理をゆっくり味わうようにして食べた。みんなも今頃、同じお弁当を食べているのかな――そう思うと、孤独はまったく感じなかった。
日差しはそそいではくれないけれど、空はちゃんと見える。風もちゃんと通ってくれる。木も沢山あるし、小さな野の花だって咲いている。
けれど、あいにく今日は雨だった。
雨の日は、別棟に行って、空いている教室を探して食べていた。この前図書室で食べていたら、図書委員の上級生に注意されてしまったので、今日は別の場所を探さなければならない。
視聴覚室のドアをそっと開けた時だった。
思いがけず人がいたので、雪乃はしばらくその場に立ち尽くしてしまった。
「す、すみませんッ！！」
慌てて頭を下げ、ドアを閉めようとすると、
「待って」
これまた思いがけず声を掛けられた。
「お昼、食べに来たんじゃないの？」
「え……あ、はい、そうです……」
「だったら、どうぞ。ここは私だけのものじゃないし」
そう微笑む少女は、雪乃がこれまでに見たどんな女の子よりも綺麗だった。
「あ、ありがとうございます……」
雪乃はそう言って、どこに座ろうかと広い視聴覚室の中を見回した。
「良かったら、一緒に食べない？」

「え……」
「もちろん、無理強いはしないけど」
「……じゃあ、一緒に……」
そう言って、雪乃は少女の隣に腰を下ろした。

2．友達（3）

「一年A組、冬木ありさよ」
「えっ、一年生だったんですか！？」
あまりに大人っぽいので、てっきり上級生だと思っていた。改めて上履きを見ると、確かに雪乃と同じ爪先部分が赤い色のものを履いている。上級生ならば、青か黄色のはずだった。
「そう。だから、敬語で話す必要はないのよ？」
クスクスッとありさは笑った。
「あなたは？」
「あ、私は、黒羽雪乃、一年E組です……あ」
言われたそばから「です」を付けてしまった雪乃に、ありさがまた笑う。
「ごめんなさ……ごめんね、私、あんまり慣れてなくて……その……」
今まで一度も学校に友達がいたことがないので、どうやって話したら良いのかわからないの……とはさすがに言えなかった。
「無理しないで。私も苦手だから。そういうのは、得意な人に任せておけばいいのよ。特に話したいことがなければ黙っていればいい。沈黙が不安な人もいるみたいだけど、私は何も気にしない」
意外な返事に、雪乃はきょとんとした顔でありさを見つめた。
「……私の顔見てても、お腹はいっぱいにならないわよ？」
ありさに言われ、雪乃はここに来た目的を思い出した。
「わぁ、美味しそう……」
雪乃のお弁当を見て、ありさが呟く。
今日のメニューは、チリメンジャコと梅干と白ゴマの入ったご飯、タラの西京漬け、菜の花の辛子和え、ジャガイモの煮付け、甘い玉子焼き、それにプチトマトだった。
「お弁当箱も素敵だし、彩りもすごく綺麗」

本当に感心しているように、ありさが言った。
そういう彼女の昼食は、プラスチックのケースに入ったサンドイッチとサラダだった。雪乃が食べるサンドイッチは大和が作ってくれるもので、市販のものはほとんど見たことがないのだけれど、それはコンビニやスーパーで目にするものとは少し違うような気もした。
まず第一に、パンが白くないし、薄っぺらくもない。しっかりと耳もついていて、茶色い粒々が入っていた。
「いきなり図々しいお願いなんだけど……」
ありさが雪乃のお弁当をじっと見つめながら言った。
「その玉子焼きと、サンドイッチ、交換してもらえない……？」
「え？　あ、うん、もちろんいいよ」
まだ手をつけていないお弁当を差し出すと、ありさは嬉しそうな顔で「ありがとう」と言って、プラスチックのフォークを玉子焼きに刺し、一口かじった。
自分が作ったものでもないのに、大和の玉子焼きは間違いなく美味しいと胸を張って言えるのに、雪乃はドキドキしながらその様子をうかがった。
「すごく美味しい……柔らかくて、ジューシーで、素朴な味がする……黒羽さんのお母さん、きっと優しい人なんだろうなぁ……」
その言葉に、雪乃の顔から笑みが消えた。
「あ、誉めてるのよ？　素朴、って、誉め言葉だからね？　優しくて、あったかくて、そういうの、全部詰まった言葉だからね？」
ありさは本気で焦っているようだった。雪乃が反応してしまったのは、もちろんそこではないのだけれど、「うん、わかってる。ありがとう」と笑顔を返し、それ以上のことは話さなかった。
「本当に美味しかった……はい、好きなの取って。これがモッツァレラとトマト、これがプロシュートとレタス、で、これが玉子」
モッツァレラもプロシュートもよくわからなかった雪乃は、玉子をもらうことにした。それはとても美味しかったけれど、マヨネー

ズたっぷりのコクのある大和の玉子サンドと違って、とてもあっさりとした、良く言えば上品な、けれども正直に言うとよくわからない味だった。
「……ほら、あそこ。だから言ったろ、いつもここで食ってんだって」
ふいにヒソヒソ声が聞こえ、雪乃は声のするドアの方を振り返った。
と、見知らぬ男子生徒が二人、ドアの隙間からサッと顔を引っ込めるのが見えた。
「……ごめんね。私、もう行くね」
ありさはそう言い、手早く机の上を片づけて立ち上がった。少しウンザリしているように見えた。
「話せて楽しかった。玉子焼きもありがとう。じゃあ、またね」
そう言ってニッコリと笑い、足早に出て行く。
突然のことだったので、雪乃は何も言うことが出来なかった。「私も楽しかった」とか「サンドイッチごちそうさま」とか、せめて「またね」くらいは言いたかったのに。きっと、無愛想な感じの悪い子だと思われているに違いない。
小さく溜め息を吐いて、雪乃は独りでお弁当を食べ始めた。

2．友達（4）

午前中は優のことでいっぱいだった頭が、午後はすっかりありさ一色になってしまっていた。

不思議な女の子だった。外見の美しさも他の子たちとはまるで違っていたけれど、それだけではない。

雪乃の周囲に自然と張り巡らされるようになっていた高い壁を、軽々と乗り越えてきた――というよりも、始めから何も無いかのように、気づけばすぐ隣に立っていたような感じがする。

翌日の昼休み、雪乃は思いきって視聴覚室に行ってみることにした。

大きく深呼吸してから、ドアを開けてみる。けれど、中には誰もいなかった。

諦めていつもの場所に行こうかとも思ったけれど、せっかくここまで来たのだから、少し待ってみることにした。

昨日ありさが座っていた、窓際の席に行ってみる。

何気なく外を見て、雪乃は思わず「あっ」と声を上げた。

見下ろした先に、ありさが立っているのが見えた。しかもその場所は、いつも雪乃が昼食をとっているあのベンチの前だった。

「ここから丸見えなんだ……」

雪乃はハッとして立ち上がり、視聴覚室を出ると、そのベンチに向かって走り出した。

「どうしたの！？　何かあった！？」

ものすごい速さで走ってきた雪乃に、ありさは目を丸くしている。

「ハァ…ハァ……早く行かないと、ふ、冬木さんが、いなくなっちゃうと、思って……」

「いなくならないわよ……あなたを待ってたんだもの」

「……知ってたの？　私が、ここで、食べてること……」
雪乃が恐る恐る訊くと、ばつが悪そうな、悪戯を見つかった子供のような顔でありさは頷いた。
「あそこから、よく見えるの」
ありさは視聴覚室の窓を指差した。

2．友達（5）

「うん……そうみたいだね」
「雨の日は、どこで食べてるんだろう、って思ってた。そしたら昨日、ひょっこり顔を出したでしょう？　あなたは私を知らないのに、私の方はすっかり知ってる気になっちゃって……」
　ありさは少し気まずそうに、視線を地面に落とした。
「昨日あれから、考えちゃって……ほら、帰るのもいきなりだったし、すごく失礼なことしたんじゃないかって……」
「そ、そんなこと！！　私、すごく嬉しかった……ほんとに、すごく嬉しかったの」
「……ありがとう。そんな風に言ってもらえて、私も嬉しい」
「あ、あの、良かったら、今日はここで、一緒に食べない？」
「え……でも……」
　ありさはそう言うと、辺りをキョロキョロと見回し始めた。
「あっ、もしかして、昨日の二人？」
「え？　あ……うん……」
「もしかして、付けまわされてるの！？」
「ううん、そんなんじゃないけど……」
「もし困ってるんだったら、私に言ってね。追い払ってあげる」
　鼻息荒く雪乃が言うと、ありさはクスッと笑った。
「笑いごとじゃないんだから！！」
「ごめんなさい……女の子にそんなこと言われたの、初めてだから……」
「私だって、言うの初めてだよ？」
「……そう……ありがとう」
「ね、食べよ？」
　ありさは少し迷ってから「そうね……」と言ってベンチに腰を下ろした。

「わぁ、竹の子ご飯……」
雪乃のお弁当を見て、ありさが溜め息混じりに言った。
「食べる？　おかずも、欲しいのあったらどうぞ」
雪乃が差し出すと、ありさは「ううん」と首を振った。
「あ、もしかして、嫌いだった？　そういう意味の「うわぁ」だった？」
「違うの。美味しそうだと思ったの。だけど、いつも貰うわけにはいかないもの」
「いつも、って、まだ二回目だよ？」
「クセになっちゃったら困るでしょ」
「私は困らないよ？」
「……せっかく、黒羽さんのお母さんが作ったものだもの……黒羽さんが食べると思って作ってるのに、私が貰ってばかりじゃ……」
母は何年も前に亡くなったの――思いきって、そう口にしてしまおうかと思ったけれど、それじゃあ誰がこのお弁当を作っているのかと訊かれたら困ってしまう。
嘘を吐いているような気持ちになって、雪乃は曖昧な笑みを浮かべた。
その微笑が、少し寂しそうに見えたのかもしれない。
「……じゃあ、一口だけちょうだい、竹の子ご飯」
「え……あ、うん！！」
「……私の一口、黒羽さんの三口分はあると思うけど」
悪戯っぽく笑うと、ありさはたっぷりの竹の子ご飯をフォークですくって食べた。

2．友達（6）

「おかえりなさい、お嬢」
「ただいま、大和。今日もごちそうさま。美味しかったよ。特に竹の子ご飯」
「それは良かったです」
「でね、お願いがあるんだけど……」
「明日も竹の子ご飯ですか？」
「ううん、そうじゃなくて……ちょっとだけ、その、全体的に、量を増やしてもらえると、嬉しいかな、なんて……」
もじもじする雪乃を見て、大和はクスリと笑った。
「わかりました。お安い御用です。そんなに気にすることないですよ。お嬢くらいの年齢の頃は、誰でも食欲が増すもんですし、なんたって健康が一番。それに、少しくらい、その、ポッチャリしてたって――」
「わ、私が食べるんじゃないもんッ！！」
大食い扱いされたことにカチンときて、雪乃は思わず叫んだ。
「……もしかして、野良猫でも見つけました？」
雪乃は口を尖らせたまま黙っている。
「竜治さん、猫はけっこう好きだったんじゃなかったかな……俺は犬派ですけど。けど、お嬢が猫飼いたいって言うなら――」
「……猫じゃない。犬でもない……お、女の子だから……」
「女の子って、子供ですか！？　一体どこの……」
「同級生！！　……昨日から……昨日と、今日と、一緒にお昼食べたの……もしかしたら、明日も、一緒に、食べられるかもしれないから……」
「それって……」
「その子が！！　美味しいって……昨日の、玉子焼きも、今日の、竹の子ご飯も……」

「お嬢……」
雪乃は口を尖らせたまま、頬を真っ赤に染めて下を向いている。
初めての友達が、雪乃に出来たのかもしれない……大和はそう思い、心からの笑みを浮かべた。
「良かったら、もうひとつ、作りましょうか？　四つも五つも同じなんで」
「ううん、そんなことしたら、きっと困らせちゃう……あくまでも自然に、何だか今日のお弁当、ちょっと量が多いみたい、食べきれるかな、良かったら手伝って欲しいな……みたいな感じにして欲しいの」
雪乃の必死のお願いに、大和はクスクスと笑った。
「……何か今の笑い方、冬木さんにちょっと似てるかも……」
「冬木さん、っておっしゃるんですか？」
「うん……冬木ありささん、っていうの」
「綺麗なお名前ですね」
「名前だけじゃないの、すごく綺麗な人なんだよ！！　あんな綺麗な人、今まで見たことないよ！！」
「それは、是非ともお会いしてみたいですね」
何気なく言った大和の一言が、雪乃の顔を曇らせた。
もし仮に、この先もっと仲良くなれたとしても、ありさを家に呼ぶことは出来ない。それはつまり、ずっと秘密を抱えたまま付き合うということだ。
そんな関係が、“友達”といえるだろうか……。
「……もしかして、ヤキモチ焼いてます？」
「えっ？」
意味がまったく解らず、雪乃はきょとんとした顔で大和を見つめた。
「……いえ、忘れてください……自意識過剰でした……」
呟くように言った言葉は、最後までは聞き取れなかった。

2．友達（7）

翌日もありさと一緒にベンチで昼食を食べ、教室に戻った時だった。

「あっ、危ない！！」

という声が聞こえた刹那、雪乃は訳がわからないうちに、教室の後ろにある金属製のロッカーに激しく身体を叩きつけられた。

「何やってんのよバカッ！！」

女子生徒の怒声が響く。

「あ、悪い……大丈――」

「大丈夫なわけないでしょッ！？」

またも彼女の声が響いた。

やっと我に返ると、クラスメイトが取り囲むように、うずくまる雪乃を見つめていた。

「あ……あの、大丈夫、だから……」

雪乃は痛む左腕を押さえながら立ち上がった。

「血が、出てる……保健室行こ」

そう言って優しく背中を押してくれたのは、須藤千波だった。さっきから、雪乃の代わりに大声を出してくれていたのも彼女だ。

「ったく、あいつら、教室でサッカーするな、って何度も言ったのに……」

まるで自分が被害を受けたようにプリプリと怒っている。

男子生徒が二人、教室の中でヘディングの練習をしていたらしい。そして、一人が勢いよく後ろに下がったところに、雪乃が通りかかり、ぶつかって弾き飛ばされる格好となった。

今日は朝から晴れて気温が高かったので、半袖ブラウス一枚になっていたのも悪かった。上着を着ていれば、皮膚が切れることはなかったかもしれない。

「あ、あの、大したことないから……」

「怒っていいんだよ？　黒羽さんは、何にも悪くないんだから」
「……ありがとう……」
「そんなお礼言われるようなことじゃないって」
千波はニッコリと笑った。見ている人が元気になるような笑顔だった。
毎朝教室に入ると、どんなに遠くにいても「おはよう！！」と声をかけてくれる女の子だった。
明るくて、活発で、スポーツが出来て、いつも大勢の友達に囲まれていて、怖いと言われている先生とも、まったく臆することなく親しげに話すような子だった。
雪乃とは、決して交わることのないタイプだけれど、あんな性格だったら……と、密かに憧れている女の子だった。
「新山センセー！！　怪我してる子がいるので手当てお願いします！！　……って、いないし」
人気のない保健室に向かって千波は溜め息を吐いた。

2．友達（8）

「どうしよう……あたしがやっても、いいかな？」
雪乃の目と腕の傷を交互に見ながら、千波が遠慮がちに言った。
「早く消毒した方がいいと思うんだよね。ロッカー、古いし。バイキン入っちゃったら大変。あたし、こういうの、慣れてるから」
そう言うと、短いスカートから覗く脚を一歩前に出して見せた。ぜい肉の一切ない、引き締まった筋肉質の脚には、沢山の怪我の跡があった。
「陸上部でハードルやってるの。しょっちゅう転んでるんだ」
えへへ、と照れくさそうに笑う。
「大変、だね……あの、じゃあ、お願いします」
「オッケー！！　じゃあ、あそこに座って」
言われた通りに丸い椅子に座ると、千波はピンセットを手に取り、慣れた手つきで金属製のポットから小さな丸い綿の塊をつまみ出した。
「オキシドール、使ったことある？」
ううん、と雪乃は首を振る。
「めっっっちゃ痛いねんッ！！」
何故か関西弁で千波が言う。
「けど、あたしは結構好き」
怪しげな笑みを浮かべる千波に、雪乃はほんの少し不安を覚えた。
「じゃあ、消毒するからね。ほんと痛いから、覚悟してね」
千波は雪乃の手首を掴み、腕を真っ直ぐにさせると、肘近くの傷口に、丸い綿を優しく押し当てた。
「イッ……」
あまりの痛みに悲鳴を上げそうになった雪乃は、慌てて歯を食いしばって耐えた。
「頑張れ！！」

千波も眉間に思い切り皺を寄せ、口をへの字に曲げながら共に痛がっている。
傷口がシュワシュワいっている。沢山の泡が出て、傷口は見えなくなっていた。
「これね、バイキンがたくさんいると、泡がいっぱい出るんだよ」
「そう、なんだ……」
ズキズキが、指先にも肩の方にも広がってきていた。
「だから、泡が出なくなるまでやらないといけないの」
「えっ……」
千波は新しい綿を取ると、再び傷口に当てた。それを何度も繰り返す。
痛みはどんどん軽くなっていた。単に感覚が麻痺してきただけのような気もしたけれど。
「うん、こんなものでいいかな。あとはクスリクスリっと……」
そう言いながら千波は、四角くカットされたガーゼにシュシュッと傷薬をつけ、傷口にそっと乗せた。
「ここ、ちょっと押さえてて？」
言われた通りガーゼの中心を指で軽く押さえていると、手際良くテープで固定してくれた。
「よし、これで終わり。でも、すごく痛いようだったり、ちょっとでも変な感じがしたら、ちゃんと病院行ってね？」
「うん、ありがとう……でも、大丈夫だと思う」
「だといいんだけど……」
ここ、と言って、千波は自分の右脚の膝を指差した。デコボコとした傷跡が残っている。
「化膿しちゃってさ。痛くて夜も眠れなかったよ。それ以上にキツかったのは、ガーゼの取替え。ぜーんぶ傷口に張り付いちゃうんだよね……剥がす度に肉が出てきちゃってさ……」
泣きそうな顔になっている雪乃を見て、千波は愉快そうに笑った。
「ま、そんな風にならないように、ちゃんと経過を見なきゃダメだ

よ、ってこと。じゃ、戻ろうか」

2．友達（9）

教室に戻るなり、千波が大声を上げた。
「井上！！　草間！！　黒羽さんにちゃんと謝りな！！」
言われた二人は、決まり悪そうに雪乃の前へとやってきた。
「……どうも、すみませんでした」
「すみませんでした……」
顎を前に出す仕草は、多分頭を下げているつもりなのだろう。
「何なのよ、その態度！！　もっとちゃんと反省しなさいよね！！」
「してるよ……なぁ？」
「ああ……教室でやるのは、もうやめるし……」
「当たり前でしょーが！！　女の子なんだからね！！　傷跡が残ったらどうしてくれんのよ！！」
自分の脚の傷跡は気にしていないようなのに、雪乃の傷に関しては本当に心配しているらしい。
「だから、謝ったじゃん……」
「その不満げな態度が――」
「あ、あの、もう、いいよ……」
気づけばみんなの視線がこちらに集中していた。
「大した怪我じゃないし、それに、わざとってわけでもないし……私も、ぼんやりしてて、気づかなかったわけだし……」
千波は何かを言いかけてやめ、大きく息を吐いた。
「あんたたち、黒羽さんが優しい人だったことに感謝するんだね」
そう言うと、千波は二人のオデコに軽くデコピンをしてから自分の席へと戻って行った。

家に帰って長袖のシャツに着替えた雪乃は、ガーゼが見えてしまわないように手首のボタンをしっかり留めた。大した怪我でもないのに心配されても困るし、原因を誤解されても困る。

お風呂上りに、誰もいないことを確認してからリビングに行き、食器棚の上の救急箱に手を伸ばす。が、あとほんの数センチ手が届かない。
「何でこんな高い所に置いてあるかなぁ……」
呟いた雪乃の背後に人の気配がしたかと思うと、その頭上ににゅっと手が伸び、救急箱を掴んで下ろした。
「座って、腕、出してください」
「えっ……」
上に腕を伸ばしていたので、パジャマの袖から傷口が丸見えになっていた。
「おかしいなーとは思っていたんですよね。お嬢、いつも袖口折ってるじゃないですか、手洗う時に濡れるのが嫌だって」
「あ……違うの、別に、やましいことがあって隠してたわけじゃ……」
「わかってます。さあ」
大和に促がされ、ソファに座る。大和は雪乃の足元に膝をつくと、手首を掴んで腕を自分の方へ引き寄せた。
「結構深く切れてますね……すぐに消毒しました？」
「うん、それは大丈夫……オキシ何とか、ってやつで、何度も消毒してくれたから」
「オキシドールじゃないですか？」
「多分、それ」
「それは痛かったでしょう……それに耐えられたなら、これは大丈夫ですね」
そう言って、何やら薬をシュッシュッと吹きかける。
「……痛い」
「我慢してください」
「痛い、痛い、痛いよーッ」
「子供ですか」
へへッと雪乃が笑うと、ガーゼに軟膏を乗せながら大和も笑った。

「化膿したら大変ですからね。本当は、明日の朝、ガーゼ取り替えたいんですけど……帰ってからでも、大丈夫でしょう」
傷口にガーゼを当て、テープを貼りながら大和が言う。竜治と優には内緒にしてくれるらしい。
「……ありがとう、大和」
「ああ、まだですよ。しっかり固定しておかないと」
大和は包帯を取り出すと、腕にグルグルと巻き始めた。
「……ちょっと、大袈裟過ぎない？」
「お嬢、きっと寝相悪いから」
「何よ、それ」
「前に言ってたでしょう？　南枕で寝たのに、起きたら北枕だった、って。何かの呪いみたいに言ってましたけど、それは単なる寝相の悪さです」
「や、大和だって、どんな寝相してるかわからないじゃない。イビキだってかいてるかもしれないし、歯軋りだってしてるかもよ？」
「優の部屋からは時々歯軋りが……あ、このことはここだけの秘密にしてくださいね」
嘘だか本当だかわからない口調で大和が言い、巻き終わった包帯の上からさらにネットをかぶせる。
「はい、終わりです。起きた時ズレてたら、その時はやり直しますからね」
はいはい、と返事をして、雪乃はパジャマの袖を手首まで戻した。

2．友達（１０）

「おはよう、黒羽さん！！」
校舎に入る手前で、思いがけず千波に声を掛けられた。
「あ、おはよう、須藤さん……部活？」
千波はジャージ姿で、顔を洗ったばかりか前髪がびっしょり濡れていた。
「うん、朝練。七時には来てるかな、いつも」
「すごい……頑張ってるんだね」
「だって、あたし、それでここに通えてるんだもん。頑張らなきゃ、退学になっちゃう」
「えっ？」
「スポーツ特待生なの。知らない？」
雪乃は首を横に振った。
「あっ、そんなことより、昨日の怪我、どう？」
「あ、うん、大丈夫だよ。昨日は、手当てしてくれたり、その、いろいろと、ありがとう」
雪乃はペコリと頭を下げる。
「もー、大袈裟なんだから。そんなに気を遣わないでいいからさ。あっ、あたしのことは千波でいいよ。っていうか、苗字で呼ばれるの、あんまり好きじゃないから、千波って呼んで欲しい。仲のいい友達は、“ちな”って呼ぶけどね」
「あ、うん……じゃあ、千波ちゃん、って呼ぶね」
「よろしく。あたしも、黒羽さんのこと、名前で呼んでいい？」
「え……あ、もちろん！！」
「じゃあこれからは……雪のん、って呼ぶね」
「えっ！？」
「嫌？　可愛いと思うんだけど」
「い、嫌じゃないよ！！　全然……」

「じゃあ、そう呼ぶね、雪のん」
最後に音符がついてそうなニュアンスで千波が言った。自分の名前なのに、自分の名前じゃないような、何だかくすぐったくて恥ずかしい気持ちになる。
「そうだ。雪のんさぁ、お昼、いつもどこで食べてるの？」
「え？　えっと……外のベンチだけど……」
そういう千波もいつも、四時間目終了のチャイムが鳴るや否や、教室をものすごい勢いで飛び出していくのを雪乃は知っていた。
「すど……ち、千波ちゃんも、教室にいないよね？」
千波ちゃん、と口に出した雪乃の心臓はドキドキしていた。思えば、大和と優以外のことを名前で呼んだのは初めてかもしれない。
「だって、早く行かないと売り切れちゃうもん、ガナッシュパン」
「ガナッシュ？　のパンがあるの？」
「あれ、食べたことない？　街のパン屋にはなかなかないもんね。昔は普通にあったらしいけど。今のパンってさ、やたら凝ってない？　あたしは、シンプルなパンの方が好きなんだよね。その点、学校に来てくれるパン屋のおばちゃんはよくわかってるよー。クリームパンもめっちゃ美味しいんだよ。あー、お腹空いてきた……」
千波が胃の辺りを押さえて溜め息を吐いた。
「一時間目始まる前にエネルギーチャージしなきゃ。あ、長々と引き止めちゃってごめんね。じゃ、また後でね！！」
雪乃に口を挟む隙を与えず、千波は笑顔で手を振ると、校舎の中に消えて行った。

2．友達（11）

四時間目が終わると同時に、やっぱり千波は教室を飛び出して行った。

「ガナッシュパンか……優は知ってるのかなぁ……」

雪乃はお弁当の袋を持つと、いつものベンチへと向かった。座って待っていると、二～三分後にありさが小さく手を振りながらやってきた。

「ねぇ、冬木さん」

「なぁに？」

「ガナッシュパン、って食べたことある？」

「ガナッシュパン？　ないと思うけど、どんなパンなの？」

「うーん、詳しいことはわからないんだけど……」

ケーキみたいに、外側にガナッシュクリームが塗られているのだろうか。それとも、クリームパンみたいに、中にぎっしり詰まっているのだろうか。それとも、チョココロネみたいな感じなのだろうか。

「ごめん、ちょっと行ってきてもいい？」

「行くってどこへ？」

「すぐ戻るから！！　先に食べてて！！」

雪乃はポケットの中に小銭入れが入っていることを確認して、パン屋さんのもとへと走り出した。

パン売り場の前は、想像を絶する混み具合だった。

「おばちゃん、ヤキソバパン三個！！」

「はいはい、ちょっと待ってて！！　あんたメロンパンだっけ？ちょっとそこ、勝手に触っちゃ困るよ！！」

「おばちゃーん！！」

「ちょっと待ってな！！　こっちが先だよ！！」

割烹着に三角巾のおばさんが一人、数十人、もしかしたら百人超

の生徒たちを相手にパンを売っていた。
「おばちゃん！！　ガナッシュパンはー？」
混雑の遥か後ろから様子を見つめていた雪乃の耳に、そんな女子生徒の声が聞こえてきた。
「ガナッシュは終わりだよ！！」
続くおばさんの声もしっかりと聞こえた。
ガナッシュパンが自分の手に入るような代物ではないのだと雪乃は思い知り、握り締めていた小銭入れをポケットに戻した。
「あれ？　雪のん……今日はパン？」
「あ、千波ちゃん……」
「何が欲しいの？　買ってきてあげる。あそこは戦場だからね。遠慮してたらイイやつ全部他の人に取られちゃうよ。あたしに任せときな」
千波はそう言って親指を立てた。
「あ、うん、ありがと……でも、いいの」
「遠慮しないでよー。あたしたち、友達でしょ？」
「え……」
友達、という言葉に、雪乃は戸惑った。千波にとっては何でもない言葉なのだろうけれど、雪乃にとってはそれは何より特別な言葉だ。
「あれ……違った？」
えへへ、と困ったように千波が笑う。
「あ、ううん、そうじゃないの……あの、私……友達、なの？」
「……あたしは、そう思ってるけど……」
雪乃の目にじんわりと涙が浮かぶ。
「えっ、えっ、何で！？　あたし、何か悪いこと言った！？」
「違うの、ごめん、ごめんね……」
「と、とりあえず、これあげるから、元気出して！！」
千波は、今買ってきたばかりのパンの袋を雪乃の胸に押し付けるように差し出した。

「今朝話してたガナッシュパンだよ。めっちゃ美味しいから」
「えっ、ダ、ダメだよ、そんなの……」
「いいから食べてみなって。じゃ、あたしは何か買ってくるから、またね！！」
そう言うと、千波は人山の中に再び飛び込んで行った。
どうしよう……と、紙袋を持ったまま、雪乃はしばらくその場に立っていた。しかし、ありさを待たせていることを思い出し、「ありがとう……千波ちゃん」と呟いてその場を後にした。
「おかえり。パン、買いに行ってたの？」
小首を傾げながらありさが言った。雪乃のお弁当の袋の隣に、ありさのものもちょこんと並べて置いてある。先に食べずに待っていたらしい。
「うん……ごめんね、待たせちゃって……」
「そんなことはいいの。それで、買えたの？　ガナッシュパン」
それが……と雪乃は、いきさつを話し、せっかくもらったパンだから、と半分に割って片方をありさに渡した。
せーの、でパンを口に入れた二人は、お互いの顔を見つめ、目を見開いた。そして同時に「美味しーッ」と叫ぶ。
ごく普通の、少し硬めの――と言っても、フランスパンのようにあえて硬く焼いてあるものではなくて、単に水分が足りないという感じなのだけど――丸いパンの中に、甘過ぎないフワフワのガナッシュクリームがたっぷりと入っていて、何ともいえない素朴な幸福感が口いっぱいに広がった。
「売り切れちゃうの、わかるね」
ありさの言葉に「うん」と頷きながら、優にも食べてもらいたいな……と雪乃は思った。

2．友達（11）（後書き）

「2．友達」は今回で終了です。
次回からは「3．初恋」になります。
（更新日は未定です・・・）

3．初恋（1）

「出来たぁ……」

雪乃はそう呟いて、レースの縁取りのついた白いハンカチを広げた。角のひとつに、たった今刺し終わったばかりの刺繍がある。

C・Sというアルファベットが、色とりどりの小さな花たちに囲まれているデザインだ。

我ながら可愛く出来た――と満足気に微笑んだのも束の間、雪乃は両肩を落として溜め息を吐いた。

「いきなりこんなの、重いかなぁ……というより、怖い？」

誰に訊くともなく呟く。

怪我の手当てや代わりに怒ってくれたこと、それからガナッシュパンのお礼を千波にしたいと思った。感謝の気持ちを伝えるには、心のこもった物を……と考え、得意の刺繍に行き着いたのだが、いざ出来上がってみると不安になる。

「やっぱり、クッキーとか買った方がいいかな……」

でも、せっかく作ったんだし……と再びハンカチを広げて見る。

「大和に訊いたってわからないよね……うん、思いきって渡そう。大事なのは気持ちだもん」

翌日、雪乃は朝からずっと、千波にハンカチを渡すチャンスをうかがっていた。

千波は一人でいることがほとんどない。別に悪いことではないのだから、友達と一緒にいても、気にせず渡せば済むことなのだけれど、そんな単純なことが、雪乃にとっては酷く難しいことなのだった。

昼休みが終わり、予鈴がなった時、やっとそのチャンスがやってきた。

ほとんどの生徒が席についている中、五時間目の教科書を忘れた

らしい千波は、他のクラスの友達のところに借りに行く、と友達に言って、慌てて教室を出て行った。雪乃は戻ってきたところを捕まえるべく、そっと席を立ち、廊下で千波を待った。
千波はなかなか戻って来なかった。教科書を借りるのに手間取っているというよりも、お喋りに花が咲いてしまっているのだろう。
ギリギリの時間になって、千波が走ってくるのが見えた。このままでは、雪乃の横も超特急で通り過ぎてしまいそうな勢いだ。
「ち、千波ちゃん！！」
雪乃は思いきって叫び、大きく手を振った。
「おお、雪のん。あたしに何か用？」
「あ、あのね、これ……いろいろしてもらったお礼なんだけど……」
「えっ！？　そんなのいいのに……でも、ありがと。嬉しい。開けてもいい？」
「う、うん！！」
千波がどんな反応をするか、雪乃はドキドキしながら見守った。
「うわぁ、可愛い……あたしが持っちゃっていいのかな、こんな可愛いの……」
千波は、壊れ物でも扱うように、ハンカチをそっと手の平に乗せて眺めている。
「むむ……これって、あたしのイニシャル……だよねぇ？　売ってるやつ……じゃない？」
「ハンカチは買ったやつだけど、刺繍は私がしたの……」
「えっ、ウソ！？　これ全部雪のんがやったの！？　ひゃー、スゴイ……雪のんって手先が器用なんだねぇ……ね、みんなに見せてもいい？」
「え……あ、うん、いいけど……」
「ちーなーみー、何やってんのー？　早くしないと――」
「あ、ねぇ、見て見て！！　この刺繍、雪の――黒羽さんがやったんだって！！　スゴイよねぇ……」
「うっそ、マジで？　見して見してー。うわっ、細かっ！！」

「なになに、何見てんの？」
千波と特に仲の良い聡美と絵里子が廊下へ出てきて、雪乃の刺繍を眺め出した。雪乃は落ち着かない気分になり、早く席に戻りたい衝動に駆られた。
「いいなー、千波。めっちゃ可愛いじゃん」
「えへへー、いいでしょー。世界にたった一枚、あたしだけのものなんだからねー」
「あたしも欲しーな……けど、すっごい大変そうだもんね。千波の眺めて楽しませてもらうよ」
「アタシもやってみようかな……」
「絵里子には無理だって。ねぇ、黒羽さん？」
「えっ……そ、そんなことないよ！！　図面写して、その通りに針刺してくだけだし……」
「それが難しいんじゃん。あたしなんて、針、指に刺しまくりだよ、絶対」
「そうだ、今度の大会に持って行こうっと。何か勝てそうな気がする！！」
ハンカチを大事そうに胸に押し当てながら、千波が言った。
大会？　と思わず雪乃は聞き返していた。
「うん。次の日曜日。県大会があるんだ」
「アタシたち、みんなで応援に行くの。ね、良かったら、黒羽さんもどう？」
「えっ……」
思ってもみなかった突然の誘いに、雪乃は戸惑った。
「競技場の近くに、めっちゃ有名なスイーツのお店があるんだよ～。帰りにみんなで食べてこよう、って話してるんだ」
「ちょっとー、主目的はそれなわけ？」
聡美の言葉に、千波が口を尖らせる。
「もちろん、千波の応援が一番に決まってんじゃん。またかっこいい走り見せてよねー」

「うんうん。で、黒羽さんも一緒に行く？」
「えっと……うん……でも、いいの、かな……」
「何でそんな言い方すんの？　いいに決まってんじゃん。こっちが誘ったんだから。ねぇ？」
千波も聡美も絵里子も、笑いながら「うんうん」と頷いた。
「ほら、そこ、いつまで喋ってる！！　もうとっくにチャイム鳴ってんだぞ！！」
先生の怒鳴り声に、千波たちは「はーい」と元気良く答え、それぞれの席へと戻って行った。

3．初恋（2）

千波が出場するのは、１００ｍハードルと４×１００ｍリレーだった。

ハードルは午前十時過ぎ、リレーは午後三時過ぎに始まる予定となっていた。

昼食は、千波の両親が全員分を持ってきてくれることになっている。千波の家は、祖父母の代から続く定食屋さんらしい。

競技場最寄の駅に九時――が約束だったけれど、雪乃は二十分以上も前に着いてしまった。まだ誰も来ていない。

「……黒羽さん？」

最初は空耳かと思った。もう一度呼ばれ、振り返ると、何故かありさが立っていた。

「やっぱり。もしかして……須藤さんの応援？」

「どうしてわかったの……？」

「有名だもの、須藤さん」

「そうなの！？」

「知らなかったの？　陸上部期待の星よ。中学生の頃から、かなり有名だったし。いくつか記録も持ってるはず。全国レベルの選手になるって言われてるのよ？」

「全然知らなかった……」

「フフッ……そういうところが、黒羽さんのいいところなのよね……」

「え？」

「何でもない。……独り、なの？」

「ううん、ここで待ち合わせしてるの……」

「そう……じゃあ、私は行くわね」

「あ、待って！！　冬木さんは、どこに……？」

「私も一緒よ。競技場に応援に行くの」

「え……じゃあ、一緒に……」
「ごめんなさいね……」
そう言うと、ありさはゆっくりと近づいてきて、申し訳なさそうな表情になった。
「実は私、他の学校の応援に行くの……」
「えっ？」
「だから、私が来てること、秘密にして欲しいんだ……」
「う、うん、わかった……」
とは言ったものの、ありさは目立つ。雪乃が誰にも言わなかったとしても、気づかれてしまうと思うのだけれど。
ありさが去ってしばらくしてから、聡美と絵里子、他にも何人かの女の子たちがやってきた。
「おはよっ、黒羽さん。早いねー」
「あ、うん……緊張して、早く起きすぎちゃって……」
「やだ、何で黒羽さんが緊張すんの？　千波なんて、出るくせに緊張してないんじゃないかな」
聡美が笑いながら言った。
競技場までは、歩いて十分ほどだった。大会が行われる競技場の隣には、練習をするための補助競技場があり、様々な色のジャージ姿の生徒たちが、思い思いに身体を動かしていた。
その中に、千波の姿もあった。その場で高く腿を上げたり、ダッシュしたりしている姿は、真剣そのものだった。いつもの笑顔も封印されている。
と、千波が金網のこちら側の雪乃たちに気づき、両腕を高く上げて大きく手を振った。
「千波ーッ！！　頑張れよーッ！！」
聡美が叫び、みんなも大きく両手を振って千波に応援の気持ちを送った。雪乃は胸の前で手を振るのが精一杯だったけれど。
千波は再び戦いの前の顔に戻り、調整を始める。雪乃は時計を見た。あと一時間もしないうちに千波が走ると思うと、緊張で胸がド

キドキした。
「もしかして、まだ緊張してる？」
聡美が顔を覗き込んできて言った。
「大丈夫だって。千波は無敵なんだから」
そう言って、雪乃の背中をパシンと叩く。
「あたしなんて、おじさんのコロッケが楽しみで楽しみで」
「コロッケ……？」
「そうそう、千波のお父さんのコロッケ、絶品なんだよ。ほんとは揚げたてがサイコーなんだけどさ、冷めても美味しいの」
絵里子がウットリしながら言う。
「だけどね……ロシアンルーレットなんだよね……」
「ロシアンルーレット……？」
「そう。ヘンなコロッケが混じってんの。もちろん、食べられないものは入ってないよ？　去年アタシ、プリンが入ってたっけ……」
「あたしなんてラムネ入ってたからね……」
「プリンのがヤバくね？」
「いやいや、ラムネのがヤバイっしょ」
「楽しそうだね」
冗談でもなんでもなく雪乃がそう言うと、聡美と絵里子は顔を見合わせて笑った。それには気づかず、家でやってみたら楽しそうだな……と雪乃は想像を膨らませた。
「あっ、噂をすれば……おはようございまーす！！」
聡美が大声で言い、他の子たちも、雪乃もそれに続く。
「おはようございます。今日は来てくれて、本当にどうもありがとう」
千波の母親は、とても優しそうな人だった。化粧っ気はまるでないが、頬はほんのりピンク色で肌がツヤツヤしている。よく笑うからか、目尻には沢山の皺があった。髪は後ろでひとつにまとめられ、生え際にはかなり白いものが目立つ。
父親の方は、口角の下がった口と、太くてつり上がった眉が、少

し怖い印象を与えていた。短く刈り上げられた髪は、ほとんどが白髪だった。

「千波のお父さん、見た目はちょっと怖いけど、実は照れ屋なだけで、めっちゃ優しい人だから、大丈夫だよ」

雪乃の耳元で、聡美が囁くように言う。その言葉に、雪乃は納得した。千波のような子が育つ家庭なのだから、きっと素敵なご両親に違いないと思う。

3．初恋（3）

競技場では、既に女子５０００ｍが終わり、男子５０００ｍが始まったところだった。それが終わると、いよいよ千波の出番だ。

雪乃が中学の体育で使った記憶のあるものとは比べ物にならない程大きなハードルが、手際良く並べられる。

スタート地点では、第一組の生徒たちが、それぞれの学校のユニフォームを着て、手首や足首を回したり、軽くジャンプしたりして走る準備をしていた。

ピストルが鳴り、選手たちが一斉に走り出す。まるで知らない人たちなのに、彼女たちがハードルを飛び越える度に、雪乃はハラハラしながら見守った。

四組目までがあっという間に終わり、スタート地点に千波が姿を現した。両肩のストレッチを始め、首を回し、最後に足首を回してからトントンと軽くジャンプしている。

雪乃は胸の前で祈るように手を組み、その姿をじっと見つめた。どうか無事に終わりますように――誰よりも先にゴールしますように――。

聡美たちが立ち上がり、大声で応援を始めた。雪乃も立ち上がったが、手は胸の前に置いたままで、声を出すことも出来なかった。

ピストルがなった瞬間、千波一人、身体ひとつ分飛び出した。その後も、千波と他の選手たちとの距離はグングンと開いていく。

「すごい……」

雪乃の口から、自然に言葉が零れていた。

千波の前にだけ、障害物などないように見えた。ハードルを跳び越えるのではなく、ただ真っ直ぐに、一息に走り抜けて行った。

走り終えた千波は、しばらく前かがみになって呼吸を整えた後、雪乃たちの方に向かって右手を上げた。客席からもわかる笑顔だった。

「惜っしい～。あと０．３秒で県の新記録だったのに！！」
スクリーンを見て、聡美が悔しそうに言った。
「ほんとだぁ……けど、チャンスまだまだあるって。何てったって、伸び盛りだからね」
「だよね。絶対塗り替えてくれるよね」
「その時、アタシたち、その場に立ち会えてたらいいね」
「立ち会えてるに決まってんじゃん！！」
「だよね！！　これからも、ずーっと千波のこと応援しようね！！」
聡美と絵里子は「イェーイ」と互いの両手を叩き合わせている。本当に仲が良いんだな……と雪乃は微笑ましい気分になった。
ロシアンコロッケの昼食が終わり――雪乃は羊羹入りのコロッケに当たってしまい、家でやるのはやめにしようと心から思った――あとはリレーを待つのみになった。
聡美と絵里子は、座って互いの身体にもたれかかりながら昼寝をしている。
雪乃は、ふいにありさのことが気になった。
近くにいないことは確かだ。こちら側の客席は七割以上が空いていてガラガラだった。反対側は、応援団の来ている高校もあり、かなりの席が埋まっていた。その中に紛れ込んでいるのかも……とも思ったけれど、制服姿の彼らに混じっていれば、それこそ目立ちそうなものだ。
そうこうしているうちに、午後の競技が始まった。まずは男子の１００ｍらしい。
「ん……そういえば、うちの二年が出るんじゃなかったっけ……」
寝起きのぼんやりした目と口調で聡美が言った。
「いいよ別に……アタシゃ千波だけ見れば……ムニャムニャ……」
という絵里子の呟きに「だね」と聡美が答え、二人は再び眠りの中へと戻って行った。
何とはなしに競技を眺めていた雪乃の視線が、ある一人の少年のところで止まった。

千波と同じように、スタートの瞬間から一人飛び出し、他の生徒たちを遥かに引き離し、雪乃の眼前を風のように駆け抜けて行った。長い脚が軽やかに動く様は、チーターのような猫科の動物を彷彿とさせた。

肩と胸を大きく上下させながら歩いて戻る少年を、雪乃は無意識のうちに見つめてしまっていた。

ふいに、少年の視線が雪乃の方を向いた。雪乃は慌てて目を逸らそうとしたが、どうしてか、金縛りにあったように動くことが出来なかった。

心臓がドキドキして、口から飛び出してしまいそうだった。顔も熱いし、身体が小刻みに震えてしまっている。

それなのに、ちっとも嫌な感じがしなかったし、逃げ出したいとも思わないのが不思議だった。

少年は軽く微笑んで、雪乃から視線を外した。ほんの数秒のことだったと思うけれど、雪乃にはとても長い時間に感じられた。

去って行く彼の後姿を見つめながら、雪乃は息苦しさを覚えていた。胸の深いところから、何かが溢れ出してくる感じがした。もう一度、彼の走る姿を見たいと思った。もう一度、視線を合わせてみたいと思った。

3．初恋（4）

ハードルで一位、リレーで二位になった千波の表彰を見届けてから、雪乃たちは競技場を後にした。

約束通り、話題のお店でケーキを食べ、優へのお土産にと色とりどりのフルーツが乗ったタルトを買った。

タルトが崩れないよう、両手で大事に箱を持ちながら、雪乃は駅から家までの道を一人で歩いていた。

今日あった様々なことが、頭の中をグルグルと駆け巡っていた。

休日を同級生と過ごすこと自体が初めてだったし、当然、一緒にケーキを食べてお茶を飲むなど初めての経験だった。

聡美も絵里子も、千波と同じように明るくてお喋り好きで、雪乃にも優しく接してくれた。けれど雪乃は、何故か緊張してしまい、ほとんど話すことが出来なかった。

人には相性というものがあるのだと、雪乃は思った。ありさや千波とは、きっと相性が良いのだ……単に雪乃が二人のことを好きなだけかもしれないけれど。

「千波ちゃん、かっこよかったな……」

何気なく呟いて、雪乃の心臓がドキンと跳ねた。千波のことを思い出していたのに、頭の中の映像が、あの少年のものに変わってしまったからだ。

「かっこ……よかったな……」

言いながら、胸がドキドキした。

また、会えるだろうか……いや、“会う”という言い方は的確ではない。雪乃が一方的に“見る”だけだ。

それでもいい、もう一度彼の走る姿を見たい。

けれど、聡美や絵里子は、きっともう誘ってはくれないだろう。気遣っていろいろ話してくれた彼女たちに、上手く応じることが出来なくて、場を白けさせてしまったことが何度もあったから……。

雪乃は足を止め、ハァ……と溜め息を吐いた。

3．初恋（5）

「おかえりなさい、お嬢。どうでした？　お友達」
「ただいま、大和。すごかったよ。あとほんのちょっとで、県の新記録だったの」
「それは凄いですね。……それ、ケーキですか？」
雪乃が大事そうに持っている箱を見て大和が訊く。
「うん。優にお土産」
「優は今、出かけてますよ。二時間くらい前に本屋に行くって出てったから、そろそろ戻ると思いますけど」
「そうなんだ……じゃあ、とりあえず、冷蔵庫に入れておくよ」
「俺が入れときます。お嬢は、うがい、手洗いを」
「はいはい」
大和が口うるさいお蔭で、雪乃はもう何年も酷い風邪を引いていない。それは竜治や優も同じだ。
「おぅ、帰ってたのか……ん？　何だ、この箱……」
竜治が冷蔵庫を覗いて言うのが聞こえ、雪乃は慌てて洗面所から飛び出した。
「ダメ！！　それは優へのお土産なんだから、触らないでよね！！」
「あん？　何で優だけなんだ？」
「高くて一個しか買えなかったんだもん……」
「……それはあれか？　遠回しに、小遣いが少ないって言ってんのか？」
「そんなこと言ってません。ほんとに高かったの。いいでしょ、別に。二人ともケーキが大好きってわけでもないんだし」
「まあな。俺は酒の方がいいし、大和は団子や饅頭の方が好きだしな」
「でしょ。今度美味しい和菓子屋さん見つけて、大和にお土産買ってくるから」

「ありがとうございます、お嬢」
「俺には？」
「未成年者にお酒買わせるつもり？　サイテーな父親だね」
冷たく言い放つと、竜治は子供みたいに頬を膨らませ、口を尖らせた。雪乃は、ちょっと言い過ぎたかな、と内心反省したけれど、口に出すつもりはない。
結局優が帰宅したのは、夕飯の時間になろうかという頃だった。今日のメニューは、優のリクエストのハンバーグだ。
「何だ、大根おろしにポン酢か……俺はこってりしたソースの方がいいんだけどなぁ」
「すいません……お嬢、疲れてるかと思いまして。サッパリしたものの方が、いいかなぁと」
「うん。今日はポン酢で食べたい気分。ありがと、大和」
「女王様がそう言うなら仕方ねぇか。今度は美味いソースで頼むぜ。チーズと目玉焼きも乗せてくれよ」
「わかりました」
「カロリー高そう……そろそろ気をつけないと、メタボになるよ？」
「バーカ。俺はまだ三十三だぞ？」
「甘いね。三十過ぎたら立派なオジサンだよ」
「ヘッ、言ってろ。人生なんてアッという間だ。お前もすぐにオバサンだよーだ」
小憎らしい言い方に、今度は雪乃が膨れっ面になる。けれど、竜治は勝ち誇ったように笑っていて、内心反省しているようには見えない。
「っていうか、さっきの女王様ってなんなのよ。せめてお姫様にしてよね」
「プッ。おい、聞いたか？　自分でお姫様とか言っちゃってるヤツがいるぞ」
「お嬢はお姫様ですよ」
「んじゃお前は騎士か」

「騎士は竜治さんでしょう。俺は執事ってところじゃないですかね」
「じゃあ、優は王子様か」
竜治の言葉に、三人の視線が優へと集まった。
「美味しい……やっぱり、大和さんのハンバーグが一番美味しいな……」
三人のやりとりなどまったく聞こえていなかったかのように、優が呟いた。
「ああ……ありがとう、優」
妙な空気が食卓に流れる。やがて、誰ともなく笑い出し、優一人がきょとんとして三人を見つめていた。

3．初恋（6）

「そうだ、忘れるところだった。優にケーキ買ってきたの」
「ボク、に……？」
「ああ、お前にだけだ。俺と大和には無しだとよ。クゥーッ」
竜治はわざとらしくうな垂れて、嘘泣きをした。
「あ、あの……」
「いいの、大人気ない人はほっといて。冷蔵庫に入ってるから、後で食べてね」
「……今、食べてもいいですか？」
「今って……ご飯食べ終わってからの方がいいんじゃない？」
「でも……食べたいんです、今」
うーん……と雪乃は眉間に皺を寄せた。
「いいじゃねぇか。腹一杯になっちまったら、飯の方を後で食やぁいい。持ってきな、優」
優は「はい」と嬉しそうに答えると、冷蔵庫に駆け寄った。
「あ、あのね、そんなに大したものじゃないの……」
優のあまりの喜びっぷりに、雪乃はちょっぴり不安になりながら、優が箱を開けるのを見守った。
「……すごく綺麗だ……ありがとうございます」
「あ、うん……」
テーブルに戻り、タルトにフォークを刺そうとする優を、三人がじっと見つめていた。
「……良かったら、食べますか？」
「いやいや、そんな小せぇの、四人で分けるわけにいかねぇだろ」
「小さくて悪かったわね……これでも、お店にあったのの中じゃ大きい方なんだから」
「……お嬢さんだけでも、食べてみませんか？」
「え……じゃあ、一口だけ、もらっちゃおうかな？」

「雪乃の一口はデケぇぞ？」
「失礼だね。人のもの、そんなに沢山食べるわけないでしょ！？」
「どうぞ」
優は笑いながらそう言って、自分のフォークを差し出す。
「え……っと……」
「いいですよ。思いきっていっちゃって」
優は大きさのことを言っているようだが、雪乃が気にしているのはもちろんそんなことではなかった。けれど、渡されたフォークを無視して、自分のものを持ってくるのも何だか悪い気がする。
「じゃ、じゃあ……いただきます」
出来る限り平静を装って、雪乃は優のフォークでタルトを食べた。そして、内心ドキドキしながら、それを返す。
優はフォークを受け取ると、まだ口をモグモグと動かしている雪乃に向かってニッコリと笑い、自分の口にもタルトを入れた。もちろん、たった今、雪乃の口に入ったフォークを使って。
「……お前は小悪魔だな、優……」
一部始終を見ていた竜治が呟くように言った。
「……何のことですか？」
優は本当に意味がわからないという風に首を傾げている。
「お、美味しい、美味しいね、このタルト！！」
雪乃は慌ててタルトを飲み込み、笑顔でそう言った。優は気づいてないようなのに、竜治が余計なことを言ったら堪らない。
「はい。甘さも酸っぱさもちょうどよくて……中のカスタードクリームが、本当に美味しいです」
「う、うん！！　タルト生地も、油っぽくなくて、い、いいよね！！」
「そう、ですね……」
雪乃のおかしなテンションに、優の眉根が寄せられる。
竜治は意味ありげな笑みを浮かべて雪乃を見ている。雪乃は竜治に向かって頬を膨らませ、プイッと顔を背けると、黙々とご飯を食

べ始めた。
優に本のことを訊きながら、チラチラとこちらを見ている竜治の視線に雪乃は気がついていた。
優と同じフォークを使うことに、確かに多少の戸惑いはあったものの、それほど大袈裟なこととは捉えていないのに、こうもしつこく見つめられていると、何だかだんだん恥ずかしくなってきた。
顔の熱さを自覚して、雪乃ははたと思い出した――あの少年のことを。
あんなドキドキは、生まれて初めてだった。誰も寄せ付けず、風を切って駆け抜ける姿。日に焼けた、引き締まった長い手脚。力強い大きな目と、優しそうな人懐っこい微笑み……。
思い出すと、あのドキドキと息苦しさが再び甦ってきて、食べ物が喉を通らなくなった。
「……ごちそうさま……」
「もう、いいんですか？」
「うん……実は、そのケーキ買ったお店で、お茶してきたんだ。だから、あんまりお腹空いてなくて……ごめんね、後で食べるから」
出来るだけ平静を装ってラップをし、雪乃は先に部屋へと戻った。
まだドキドキが止まらない。
「どうしちゃったんだろ、私……」
ドアを閉めて呟くと、雪乃はフゥ……と長い溜め息を吐いた。

3．初恋（7）

「竜治さん、ちょっといいですか？」
「おぅ、いいぞ」
ソファに座り、ナイターを見ながらビールを飲んでいる竜治の向かい側に、大和は腰を下ろした。
「お嬢のことなんですが……」
ドアの方をチラリと見ながら、大和が小声で言う。
雪乃は入浴を終え、自分の部屋にいる。優はまさに今、入浴中だ。
「優に恋しちまったかなぁ……おっ、いいぞ、行け！！　突っ込め！！　……ヨッシャーッ！！」
竜治の贔屓のチームが、同点に追いついたところだった。二塁には勝ち越しの走者がいる。すっかりテレビ画面に釘付けだ。
「あ、あの……竜治さん？」
「あん？　ああ、心配すんなって……ちっ、何だよ、んなイイ球見逃してんじゃねーよ」
「……今、何て言いました？」
「あん？　……ああ、雪乃が優に恋しちまったかな、ってやつか？」
「……まさか」
大和は、ありえないというように首を振って笑う。
「俺もな、雪乃はいつかきっとお前に惚れると踏んでたんだけどなぁ……優は、ちっとばかし心配だよなぁ……優がどうのってことじゃねーぞ？　ただ、あいつは魔性の男になるだろうからなぁ……雪乃にはやっぱりお前の方が――」
「俺は真面目に心配してるんですけど」
少々きつい口調で、大和は竜治の言葉を遮った。
「だから、心配すんなって言ってんだろうが。あいつももう十五だ。恋くらいしたっておかしくねーだろ。むしろ喜ぶべきことだ」
「様子がおかしかったのは、恋をしたからだと確信してるんですか

？」
「ああ、そうだ。大和、お前は恋したことあるか？」
「……いいえ」
「俺はある。心底惚れたし、心底惚れられた。だからわかるんだよ。あの顔は、恋する女の顔だ」
「はぁ……」
納得のいかない様子で、大和は言った。
何しろ突然のことだ。今朝出かける時までは、いや、ケーキを食べるまでは、いつもと何も変わりがなかったのだ。体調が悪いか、あるいは友達と何かがあったと考える方が自然だと、大和は思っているのだった。
「まぁ、相手が優、ってのは、間違いの可能性もあるけどな」
ふいに真面目な口調になって、竜治が言う。
「あれだろ、大会ってのは、いろんな学校から、いろんな奴が集まってくるんだろ？」
「その中の誰かってことですか？　まさか……」
「何でお前はさっきから“まさか”ばっかりなんだ？」
「だって、そんなに簡単に、人を好きになるものですか？」
「ああ、なるさ」
「相手のこと、ろくに知りもしないのに？」
「そんなのは関係ねーんだよ。一目見て、ズキュンときちまう。自分では、どうにもできねぇ。人には理解されないこともあるだろうし、自分自身でもわかんねーこともあるかもな」
「はぁ、そんなものですか……」
「もちろん、長い時間を一緒に過ごして、気づけば生まれてた想いってのもあるけどな。ま、それは恋っつーより、愛だな、愛」
「はぁ……」
「……お前が恋をする日が楽しみだ」
竜治はそう言って笑うと、大和の髪をクシャクシャと撫で、再び野球観戦に戻って行った。

3．初恋（8）

「あ、雪のん。昨日は応援に来てくれてありがとね」
お弁当を持って教室を出たところで、千波に声をかけられた。
「ううん、私の方こそ、すごく楽しかった。誘ってくれて、ありがとう。それから、おめでとう」
「へへ、ありがと。雪のんのハンカチのおかげだね。でも良かった。退屈したんじゃないかと思ってたから」
「全然！！　ああいうところ行くの、初めてだったし、運動会とかとは、全然レベルが違うんだもん、当たり前だけど」
「じゃあさ、また応援に来てよ。気が向いたらでいいからさ」
「うん！！　あ……」
またしても、彼の姿が頭いっぱいに甦り、雪乃は真っ赤になって黙り込んだ。
「ん？　どうかした？」
「う、ううん、何でも、ないよ？」
千波は首を傾げながら、雪乃の顔をじっと見つめている。
「何でもない、って言われても、耳まで真っ赤なんだけど？」
きょとんとした顔でそう言ってから、千波は突然ニヤリと笑った。
「あたしさ、すっごい鋭いんだよねー、そういうことに関しては」
「なっ、何のこと？」
「言っていいの？」
千波のニヤニヤ笑いに、雪乃は少し怖くなった。このまま会話を続けたら、呆気なくすべてを白状してしまいそうだ。
「あっ！！　わ、私、人、待たせてるから、行かないと！！」
「ちょーっと待ったぁー」
千波に背を向けかけた雪乃は、むんずと肩を掴まれ、再び千波と向き合うことになった。
「無理に聞き出そうなんて思ってないから。そりゃあ、興味はシン

シンだけどもさ。ただ、あたし、力になるから。それだけは、覚えといて」
「千波ちゃん……ありがとう」
「うん……って、肯定したってこと？　やっぱり昨日の大会で好き――」
「あわわわわっ、も、もう行くね！！　またね！！」
雪乃は今度こそ千波の手を振り切って、ありさの待つ場所へと向かった。
好き、な人……千波が言いかけた言葉を、口の中で呟いてみる。
雪乃も薄々気づいてはいた。これはまさに、一目惚れ、というやつなのだろうと。
けれど、まさか自分の身に起こるなんて、思ってもみなかった。

3．初恋（9）

「昨日はいいお天気で良かったね」
窓の外を見ながらありさが言う。
明け方から降り出した雨は、お昼になった今もしとしとと降り続き、止む気配がない。
「そうだね。昨日はほんと、気持ちのいいお天気だったよね。そういえば、あれから会えなかったね」
白身魚のフライを頬張りながら、雪乃は言った。
「そうね……黒羽さんたちのところからは、見えない席だったのかも……須藤さん、すごかったね」
「うん！！　あんなにすごいなんて知らなかったからビックリ！！
冬木さんの方は？　応援してた学校、どうだったの？」
「いい結果だったわよ。いくつかの競技で優勝してたし」
「ほんと！？　すごい！！　ちなみに……たとえば、何の競技？」
何ていう高校？　と訊くのは、立ち入りすぎているような気がしたので、雪乃はそう言った。
「そうね……男子の１００ｍとか、リレーとか……」
その言葉に、雪乃の心臓がドクンと大きく跳ねた。
男子１００ｍの優勝者はあの少年――名前は綾瀬誠（まこと）人と表示されていた――だったし、リレーの優勝チームにも彼の姿があった。ありさが応援していたという高校に、あの少年がいることは間違いない。
ありさに彼のことを訊いてみようか……だけど「どうして？」って訊かれたら、何て答えればいいの？　――雪乃はドキドキしながら考えた。
「あっという間に六月ね……」
急にありさが話題を変えたので、雪乃は誠人のことを訊ねるチャンスを逸してガッカリしたような、逆にホッとしたような、複雑な

気持ちになった。
「試験もすぐよ？　それが終わったら夏休み……ね、黒羽さんは、夏休みどうするの？」
「え？　私は、別に……暑いの苦手だし、ずーっと家の中にいるかも」
「家の中で何してるの？」
「夏休みはいつも、一日一冊本を読むことにしてるの」
「ええっ！？　すごい！！」
「ううん、全然すごくないよ。推理ものとかファンタジーとか、難しくないのばっかだもん。哲学とか歴史の本とかなら、すごいかもしれないけど」
「それでもすごいわよ、一日一冊なんて。私も割と読書は好きな方だけど、せいぜい月に四～五冊ってところだもの。でも、どこかに遊びに行ったりはしないの？」
　やっぱり普通は友達とどこかに出かけたりするんだろうな……と思いながら、雪乃は首を横に振った。
「あ、でも、花火大会だけは毎年行ってるよ。少し早めに行って、露店でいろいろ買い食いしたり」
「フフッ、それ楽しそう」
「うん。不思議だよね。露店で買ったものって、どんなものでもそれなりに美味しく感じちゃうもんね」
「そうなの？」
「そうじゃない？」
「……食べたこと、ないから」
　そう言って笑ったありさの顔は、どこか寂しそうに見えた。
「あ、でも、衛生的に問題あるらしいから、食べない方がいいかもよ？」
　もう少し上手いフォローが出来ないものかと情けなく思いながら、雪乃は言った。
「冬木さんは？　夏休みの予定、何かあるの？」

「予備校の夏期講習」
「えっ、すごい……将来のこと、ちゃんと考えてるんだね……」
「考えてないから、そんなものに通うのよ」
ありさはそう言って、つまらなそうな顔で、豆のサラダをフォークでグチャグチャとかき混ぜた。
「……あのさ、もし、良かったら……花火大会、一緒に行かない……？」
自分でも思いがけないことを、雪乃は口にしていた。
「えっ？」
ありさは心底驚いた様子で、大きな目を雪乃に向けた。
「あ、もちろん、私と二人だけで、って、ことだけど……」
「でも……いつも一緒に行ってる人たちに悪いわ……」
「いいのいいの、家族だもん」
ありさは綺麗な眉を寄せ、明らかに困った顔をしている。そんなに悩むということは、行きたい気持ちがあるのだろうと、雪乃は思った。
「ね、一緒に行こうよ。私、冬木さんと一緒に行きたいの」
思いきってそう言うと、ありさの顔がフッと緩んだ。
「……浴衣、着ていく？」
「え？　あ、うん、いつも浴衣で行ってるよ」
「……私、持ってないから……買いに行くの、付き合ってくれたりする？」
「も、もちろん！！　喜んで！！」
「……じゃあ、行く」
そう言って、ありさは嬉しそうに笑った。

3．初恋（9）（後書き）

「3．初恋」は今回で終わりです。
次回からは「4．花火大会」になりますが、更新日は未定です。

4．花火大会（1）

「花火大会、今年は冬木さんと行くから」
とある夕食の席で雪乃が言うと、竜治は大袈裟に溜め息を吐き、ガックリと肩を落とした。
「そうか……ついにこの時が来てしまったか……そうやってお前は少しずつ、パパのもとから離れて行くんだな……」
「何なのよ、その三文芝居」
雪乃がバッサリ斬り捨てると、竜治はチッと舌打ちし、澄ました顔でご飯を食べ始めた。
「浴衣は着ていかないのか」
キュウリの漬け物をバリバリと齧りながら、竜治が言う。
「着ていくよ、もちろん。冬木さんは持ってないらしいから、今度の日曜、一緒に見に行くの。冬木さんの浴衣姿、綺麗なんだろうなぁ……どんなのが似合うか楽しみ」
「気に入ったのがあったら、お前も買っていいぞ」
「いらないよ。三枚もあるもん」
微笑みながら雪乃は答える。
雪乃の持っている浴衣はすべて、母が自身の病気を知った時に、用意しておいてくれたものだ。淡いピンク地に鮮やかな花々の描かれた華やかで可愛らしいものと、エンジ色の生地に牡丹の絵が描かれた少し大人っぽいもの、それから紺色に朝顔の絵が描かれた昔ながらの素朴な雰囲気のもの。
母は、自分がその時まで生きられないことを知って、成人式の着物まで用意してくれていた。その振袖を、雪乃はまだ見ていない。二十歳になった時の楽しみにとってあるのだ。
「……念の為に言っておきますけど」
雪乃は箸を置き、竜治の方を真っ直ぐに見た。
「もし、会場で会うことがあっても、ぜーーーったいに他人のフリ

してよね？」
あれだけの混雑の中、偶然出くわすこともないとは思うのだけれど、雪乃はそう釘を刺した。
「他人のフリしてよね、か……」
夕食後、いつものようにナイター中継を見ながら、竜治が呟くように言った。
「世の中のお父さんなんて、みんなきっとそんなもんですよ」
大和はつとめて軽い口調で言った。
「……そういうことにしておくか。しっかし、男三人で花火大会ってのも、なーんか侘しいよなぁ……今年は久しぶりに、店でもやるか」
黒羽組の“まともな”仕事のひとつが、いわゆる的屋だった。
「以前にもやったことが？」
「ああ、雪乃が来る前にはちょいちょいな。だから、お前や優も知らねーやな」
「何の店をやるんです？」
「そりゃあ、たこ焼き屋に決まってんだろ」
「竜治さん好きですもんね」
「おうよ。作りながら食やぁ、一石二鳥だろ？　食い放題だ」
途中で飽きると思いますけど……と大和は内心呟いた。
「おう、優。お前もたこ焼き屋やるか？」
風呂場から、髪をタオルで拭きつつ出てきた優は、何のことかときょとんとしながら小首を傾げている。
「花火大会の日、露店やることにしたんだ。俺は手伝うけど、優はどうする？」
大和の言葉に、「ボクもやります」と、特に楽しみでもなさそうな口調で優は答えた。
「よし、んじゃ決まりだな。超イケメン三人の店だ、忙しくなるぞー」

上機嫌で言う竜治に、大和と優は密かに目を合わせて苦笑した。

4．花火大会（2）

八月中旬の日曜、花火大会当日の午後四時ちょっと過ぎ、駅前の待ち合わせ場所で待つ雪乃のもとに、ありさが小走りでやってきた。
「ごめんね、いろいろ、手間取っちゃって……」
「ううん、大丈夫、私も来たばかりだし……走ってこなくても良かったのに」
ありさのおでこには、玉のような汗がいくつも浮かんでいる。雪乃は巾着からハンカチを取り出し、ありさに差し出した。
「ありがとう。自分の使うから……あ、そうだ」
自分の巾着を開いて中を覗いたありさは、ハンカチではなく、ヘアピンを取り出した。
「エンジ色の浴衣着てくるって言ってたから、それに合わせてみたんだけど……」
ヘアピンには、縮緬で作った小さな花がいくつもついていた。
「ちょっと、いい……？」
「う、うん……」
ありさは雪乃に近づくと、真剣な顔つきでその前髪を何度も斜めに梳き、慎重にヘアピンで留めた。
「……うん、可愛い」
満足そうに微笑んで雪乃から離れる。いつも前髪を真っ直ぐに下ろしている雪乃は、オデコが出ていることが恥ずかしくて落ち着かない気持ちになった。
「変、じゃない？　オデコ、出てるの……」
「変じゃないよ、全然。黒羽さんのオデコ、つるんとしてて、すごく可愛い。あ、鏡見てみる？」
ありさは巾着から小さな鏡を取り出すと、雪乃の顔が映るように向けた。
「……なんか恥ずかしい……」

雪乃の顔が、みるみる赤くなる。オデコが全開になっているわけではないけれど、いつもは隠れている眉毛が表に出ているだけで、部屋着で街に出てしまったような恥ずかしさを覚えた。
「大丈夫。私も、恥ずかしいから……」
「あ……そう、そうなの！！　髪、アップにしてきたんだね」
いつも下ろされているありさの長い髪は、頭の高い位置でひとつにまとめられている。そこには、雪乃につけてくれたヘアピンと色違いの縮緬の花がついたかんざしが挿してあった。
「うん……浴衣には、やっぱり、これかなって思って……首筋、スースーする……」
そう言いながら、ありさは恥ずかしそうにうなじを擦った。
細くて長い首が、綺麗だった。雪乃と一緒に選んだ、濃い紫地に菖蒲の絵が描かれている大人っぽい浴衣が、とても似合っている。
「すごく綺麗……年上のお姉さんみたい……」
うっとりと見つめながら、雪乃は呟いた。
「ありがとう……黒羽さんも、すっごく可愛い」
「えへ、ありがと……じゃあ、行こっか」
並んで歩き出すと、二人の下駄の音が、カラコロと心地良い音を立てた。
「いいな、長い髪。いろいろアレンジできて楽しそう」
「それが、私、不器用だから、いろんなアレンジとかできなくて。だから、いつも下ろしっぱなし」
「そっか……美容院でやってもらったの？」
「うん。予定より、時間かかっちゃって……まとめにくい髪みたい」
「すっごくサラサラだもんね……あげてもすぐ落ちてきちゃいそう。いいな、綺麗な髪……」
「ありがとう。でもね、すごく猫ッ毛で、すぐにペシャンコになっちゃうの。どんどん少なくなってる気がするし……そのうち禿げちゃうんじゃないかな……」
冗談なのか深刻なのかわからない口調でありさが言った。

「黒羽さんは、緩くパーマかけてるの？」
ううん、と雪乃は苦笑した。
「クセッ毛なの。だから、長くは伸ばせないんだ。ボワーッて広がっちゃって。この長さが限界」
クセ毛の人の中には、長く伸ばすと重みでクセがマシになり、短くすると爆発してしまう人もいるらしいけれど。雪乃の場合は、顎より少し下、肩には触れないくらいの長さがちょうど良かった。
「その長さ、すごく似合ってる。フワフワで、外国の女の子みたい。カチューシャとか、リボンとか、似合いそう」
「……誉められてる……？」
「もちろん。黒羽さんって、“女の子”って感じ。綿菓子みたいな、マシュマロみたいな、柔らかくて、甘ぁい感じ」
「そんなこと言われたの、初めて……」
そもそも、友達がいたことがないのだから、髪について話すのも、お互いの印象について話すのも、初めての経験なのだけれど。
髪は、ずっとコンプレックスのひとつだった。ありさのような、サラサラの真っ直ぐな髪に、ずっと憧れていた。きっとこれからも憧れ続けるとは思うのだけど、そんな風に言われて、雪乃は自分の髪が少しだけ好きになった。
他愛ないお喋りをしながら歩いていると、ぽつりぽつりと露店が見え始めた。

4．花火大会（3）

「ね、何食べる？　何がオススメ？」
ワクワクを隠しきれない様子で、ありさが言う。
「まずは……チョコバナナなんてどうかな？」
「それ美味しそう！！」
「行こう！！」
焼きそば、たこ焼き、たい焼き、カキ氷、リンゴ飴、綿菓子、ラムネ……様々な誘惑をくぐり抜け、お目当てのチョコバナナのお店を見つけた。
雪乃は走っていって二本買ってくると、ひとつをありさに手渡した。
「ありがとう。いくらだった？」
「いいの。おごらせて」
「え……ありがとう。じゃあ、次のお店は私におごらせてね？」
「うん。食べる気満々だね、冬木さん」
ありさはフフッと笑うと、口を大きく開けてチョコバナナに齧りついた。
「……美味しい……」
「でしょ？　でもね、実はこれ、家でも簡単に出来るんだよ」
「そう……よねぇ。バナナに溶かしたチョコつければいいだけだものね」
「うん。あ、そうだ、今度学校に持っていくよ。お昼に一緒に食べよ？」
「うん！！　……ね、あそこは何のお店？」
ありさの視線の先には、ヨーヨー釣りのお店があった。
「ヨーヨーを釣るんだよ。紙紐の先にフックみたいなのがついててね、ヨーヨーの輪ゴムの部分に引っ掛けるの。やってみる？」
「難しそう……」

「大丈夫。やってみようよ！！」
チョコバナナを急いで胃の中に収めると、雪乃はありさの手を引っ張って、ヨーヨー釣りのお店へと連れて行った。
「はい、いらっしゃい。どーぞ」
「これ、すぐに切れそう……」
渡された紙紐を見て思わず呟いた雪乃は、店のおじさんにジロリと睨まれた。
竜治が教えてくれたことがある。“より”が甘ければ甘いほど、紙は切れやすい。当然、切れやすくした方が、お店は儲かる。このお店では、手元の一箇所を軽くよってあるだけだった。
雪乃の言葉通り、二人ともひとつも取れないうちに、紙が切れてしまった。
「はい、残念でした。好きなの一つずつ持ってっていいよ」
沢山釣られずに済んで嬉しいのだろう、さっきとは別人のような笑顔でおじさんが言った。
「じゃあ、私は……このピンクのやつにしよっと」
雪乃が選ぶと、ありさも「私も」と言って、そっくり同じ模様のものを拾い上げた。
「これ、すごく楽しい」
歩きながらずっと、ありさはヨーヨーをパンパンと叩き続けている。
「だよね。単純なのに、何でこんなに楽しいんだろうね」
雪乃も負けずにパンパン叩く。
「しばらくはハマっちゃいそう」
「でも、すぐにしぼんじゃうよ？」
「え、そうなの！？」
「うん。あれ、結構寂しいんだ……ね、次は何する？　……っていうより、何食べる？　かな？」
「フフッ……あ、たこ焼き。私、たこ焼き食べたい！！」
「歯に青海苔ついちゃうよ？」

「いいじゃない。焼きたてのたこ焼き、食べてみたい。ほら、あそこのお店、すごく繁盛してる。きっと美味しいのよ……それとも、かっこいいお兄さんたちがやってるからかな？」

ありさの指差す先を見て、雪乃の顔から血の気が引いた。

4．花火大会（4）

「どうかした？」
「えっ？　あ、ううん、別に……あの、私は、たこ焼きは、その……」
「嫌い？」
「う……ううん、好き、だけど……」
好きなものを嫌いとは言えなかった。いくらそこが、竜治たちの店であっても。
「あ、あのね、お腹、あんまり空いてないから……ラムネ！！　喉、渇いちゃった！！　ラムネ飲みたい！！」
と言った瞬間、雪乃のお腹がグゥ……と大きな音を立てた。さっきから漂ってくるたこ焼きの匂いに、雪乃の胃袋は我慢出来なかったようだ。
「あ、あれ？　お腹、空いてるのかな？」
アハハッと笑うと、ありさは小首を傾げてから笑った。
「とりあえず、どんなものか、覗いてみない？」
「え？　……そ、そうだね……」
竜治には「他人のフリをするように」と釘を刺しておいた。ふざけた性格ではあるけれど、雪乃が嫌がるようなことをする人ではない。間違っても、父親だと名乗ることはないだろう。
雪乃はそう信じて、けれどやっぱりドキドキしながら、その露店へと近づいていった。
店の周りは、人で溢れていた。その八割が若い女性だ。
優が粉を溶いて型に流し入れ、大和がそこにタコを入れ、焼けたものから手際良く引っくり返し、竜治が出来上がったものをパックに詰め、ソースと鰹節と青海苔をかけて客に渡している。
三人とも紺色の浴衣を着て、オデコに手拭いを巻いていた。真剣な顔つきは、雪乃の知っているいつもの三人とは別人のようで、何

だか不思議な気持ちになる。
「ね、黒羽さんは、どの人がタイプ？」
「……ええっ！？」
「そんなに驚くようなことだった？」
「え……っと……私は……ちょっと……」
「あの中にはタイプはいない、ってこと？」
「えっ？　あ、うん、そう……いうこと、かな……」
「じゃあ、どんな人がタイプなの？」
ありさに訊かれた瞬間、雪乃の脳裏に誠人の姿が思い浮かんだ。
また、トクトクと鼓動が速くなる。
「わ……かんない……そういう冬木さんはどうなの？　どんな人がタイプなの？」
「私？　私は……年上の、大人な人がいいな……あの三人だったら、一番手前の人」
一番手前には、お客さんからお金を受け取り、愛想良く笑っている竜治の姿があった。
「……歳は大人でも、中身は子供、って人もいると思うよ……」
明らかに竜治のことを思いながら雪乃は言った。
「そうよね……じゃあ、年齢も、精神も、大人な人。黒羽さんは？　年上？　年下？　それとも、同い年がいい？」
「え……うーんと……」
正直言って、タイプというものがどういうものなのか、雪乃にはわからない。そんなこと、今まで一度も考えたことがない。
例えば、ありさは年上がタイプだと言った。それは、ありさが年上の人以外は好きにならない、ということなのだろうか。
誠人に、多分、恋というものをしてしまったのは、誠人みたいな同い年のスポーツマンが好きだったから？
確かに、誠人の走る姿に、雪乃は強く惹かれた。もし誠人が、図書館で本を読んでいたり、どこかのステージでピアノを弾いていたりしたら、果たして惹かれたのかどうかはわからない。

ということは、雪乃のタイプは、“走るのがものすごく速い人”ということになるのだろうか。雪乃はウーンと首を傾げた。

走るのがものすごく速ければ、誠人でなくてもドキドキしてしまったのだろうか……いや、それは違う。誠人だったからだ。沢山の人の中で、誠人だけが違って見えた。

あの時の誠人の微笑みを思い出し、雪乃の胸がキュンと痛んだ。

4．花火大会（5）

「……黒羽さん？」
「あ、ごめん……ボーッとしちゃった」
「なんだ……そんなに真剣に考えなくてもいいのに、って言おうとしたのに」
そう言って、ありさは楽しそうに笑った。
「ね、やっぱり私、たこ焼きがすごく食べたいの。並んできてもいい？」
「……私も一緒に行く」
いくら竜治と顔を合わせるのが嫌だからといって、ありさを慣れない露店に一人で並ばせるのは嫌だった。ありさだって、雪乃と一緒に並びたいはずだ。
「はい、いらっしゃい」
竜治は雪乃をチラリと見ただけで、他のお客さんと態度を変えるようなことはしなかった。
けれど、何となく気まずくて、雪乃は半分ありさの後ろに隠れ、注文はありさに任せることにした。
「二つください」
「はい、二つね。お嬢さんたち、とっても綺麗だから、オマケ」
そう言って、竜治はそれぞれのパックに二つずつ、オマケのたこ焼きを無理矢理詰めた。
「あ、ありがとうございます……」
「どういたしまして。楽しんで」
ありさと雪乃の顔を交互に見て、竜治が笑顔で言った。
大和と優も、雪乃たちの方を見てはいないが、小さく微笑んでいる。
雪乃は何だか心がじんわりと温かくなって、自然と微笑みを返していた。

「素敵な人だったな……」
たこ焼きを頬張りながら、ありさが呟くように言った。
「……だ、誰のこと？」
答えはわかりきっている気もしたけれど、雪乃は訊いてみた。
「さっきのたこ焼き屋さん。ね、露店の人って、みんなあんなにかっこいいのかな？」
「まさか……っていうか、さっきの人も、そんなに、あれじゃない？　何ていうか、その……」
「素敵だったわよ？　近くで見たら、もっとかっこよかった。何より優しそうだったわ。楽しんで、だなんて。ね、幾つくらいだと思う？」
「えっ？　そ、そうだなぁ……三十は超えてそう……？」
「そう？　まだ二十代じゃないかな……別に、三十代でも構わないけど」
ありさはほんのり頬を染めて楽しそうに言った。
「ね、また会えるかな？　この辺の人かな？」
「あのね、冬木さん、言いにくいことなんだけど……ああいうお店やってる人って、その、いわゆる普通の人じゃないっていうか……」
「普通の人じゃない……？」
「あ、つまり、その……サラリーマンとかとは違うっていうか……」
「サラリーマン以外の仕事なんて、いくらだってあるわよ？」
「それはそうなんだけど……」
「あの人たちは、たこ焼き屋さんがお仕事なんでしょう？　あ、そっか……日本全国のお祭り回ってるのね……来年まで会えないってことかしら……」
ありさは立ち止まって寂しそうに言った。
雪乃は迷っていた。黒羽組のことを言うつもりはない。けれど、竜治が自分の父親であることくらい、言っても構わないのではないかと……。それでありさが喜ぶかどうかはわからないけれど、少な

くとも、雪乃の隠し事がひとつ減ることにはなる。

4．花火大会（6）

「あ、あのね……」
「あれ、雪乃ちゃん？」
ふいに名前を呼ばれ、雪乃は驚いて振り返った。
「やっぱり雪乃ちゃんだ。おめかししてるから、最初わからなかったよ……今日はまた、エライ美人さんと一緒だねぇ」
声の主はそう言って、品定めでもするかのように、ありさの全身を見る。
「……佑（たすく）さんだって、綺麗な女性達と一緒じゃないですか」
ありさを隠すように二人の間に立って、雪乃は言った。
「上客だからね。機嫌とっとかないと」
佑は雪乃の耳元に口を寄せ、囁くように言った。雪乃は背筋が寒くなった。
「でも、綺麗、っていうのは、同感しかねるかな」
綺麗っていうのはああいう子のことだよ――とでも言いたげに、軽く唇を舐めながら、ありさの方をチラリと見る。ありさもその視線に気がつき、さり気なく顔を背けた。
「わ、私たち、行くところがありますから……失礼します」
雪乃はありさの手をしっかりと握ると、くるりと佑に背を向けた。
「またね、雪乃ちゃん！！　と、お友達！！」
しばらく早足で歩いた後、雪乃は立ち止まって溜め息を吐いた。
「ごめんね、冬木さん……不愉快な思いさせて……」
「ううん、全然平気。でも……知り合い、なの？」
「え？　……あ、うん……父の、知り合いの、息子さん……」
上條佑――あの上條の、一人息子だ。
当然親しくなどないけれど、上條という名を口にするのがどうしても嫌で、仕方なく“佑さん”と呼んでいる。
雪乃が佑と知り合った頃、彼は十九歳だったけれど、まだ高校に

通っていた。その後、ちゃんと卒業したのかどうかも定かではないが、いつの間にかホストになり、今はいくつかのホストクラブのオーナーも兼任しているらしい。
上條のゴツゴツした顔とは似ても似つかない、女性的な綺麗な顔立ちをしていた。その上トークが上手いらしく、常に人気はトップらしい。
雪乃も彼を“悪人”とは思っていない。嫌なことを言われたことも、されたこともない。けれど、どうしてもあの軽薄さが好きになれなかった。
「……私、あんなにシャツの胸元はだけてる人、初めて見たわ」
深刻な口調でありさが言うので、雪乃は思わず笑ってしまった。
「だよね。いくらなんでもボタン外しすぎ。自分ではかっこいいとか、セクシーとか思ってるんだろうけど」
「うんうん。せっかく顔立ちは整ってるのに、そのほかの何もかもが残念過ぎるよね」
「宝の持ち腐れ？」
雪乃とありさは、佑の姿を思い出しながらクスクスと笑った。今頃くしゃみをしているかもしれない。
「花火まで、まだ時間あるね。どうしようか」
雪乃が言った時だった。

4．花火大会（7）

「おっ、冬木ありさじゃね？　浴衣姿じゃん、超ラッキー」
見知らぬ少年が、携帯のカメラをこちらに向け、何度もボタンを押している。
ありさの方を見ると、きつく眉根を寄せて顔を背け、明らかに嫌がっていた。
「ちょ、ちょっと！！　勝手に写真撮るなんて、非常識でしょ！？」
雪乃は少年のもとへ駆け寄ると、出来るだけ大きな声で抗議した。
「ああ？　うっせーな。テメエなんか撮ってねーよ。自意識過剰なんじゃねぇの？」
少年は「ププッ」といかにも馬鹿にしたように笑う。
「け、消しなさいよ！！　今撮った写真、全部消しなさい！！」
「は？　なんだよ、エラソーに。誰が消すか、バァーカ」
威嚇のつもりか、少年は雪乃に思いきり顔を近づけて言った。どう見ても未成年なのに、タバコの臭いがして、雪乃はあからさまに顔をしかめた。
「ね、ねぇ、もういいよ、行こう……？」
いつの間にか後ろに来ていたありさが、小さな声で囁いた。
「うわっ、マジでカワイイんだけど……」
少年はそう言って、再びありさにカメラを向けた。
「やめなさいって言ってるでしょ！？」
雪乃は思わず携帯を手ではらった。
「何しやがんだよ、このブスッ！！」
「あ、あんたみたいな顔に言われたくないわよ！！」
「なんだと！？　テメエ、許さねーぞッ！！」
道行く人たちが、こちらをチラチラと見ていたけれど、誰も助けてくれる気配はない。
「お、女に暴力振るおうなんて、あんた、顔だけじゃなくて、心も

腐ってんだね！！」
「テメェ……」
殴られる、と思い、雪乃はギュッと目を瞑った。
しかし、次に聞こえたのは、自分の悲鳴ではなく、少年の「うわっ」という情けない声と、ドサッという音だった。
「あ、悪ィ悪ィ。ぶつかっちまった」
目を開けると、少年が無様な格好で地面に倒れていた。
「大丈夫かぁ？　ほら、手ぇつかまれ」
そう言って、手を差し伸べながら少年に歩み寄っているのは、竜治だった。
と、バキッという、少年にとっては悪夢としか言いようのない音がした。
「あぁあああぁあ、オレの携帯がぁぁぁぁッ！！」
「ああ、悪ィ悪ィ。うっかり踏んじまった」
竜治がわざとらしく頭をポリポリとかいている。その間も、携帯の上の足をどけるどころか、グリグリと念入りに踏みつけている。
「なっ、何やってんだよオッサン！！」
少年は真っ赤な顔で怒り、立ち上がった。
竜治を睨みつけているようだが、身長差がありすぎて、結果的に見下ろされる形になっている。
「……弁償させていただきますんで、ご住所とお名前を、お聞かせ願えますか？」
低く、抑揚の少ない声でゆっくりと竜治が言った。その目は、雪乃が今まで見たことのないほど冷たく鋭いものだった。
少年は、「うっ……」と呻いたまま、何も言い返せないでいる。
「どうしました？」
竜治が少年との距離をじりじりと詰めると、少年は、悔しそうな、泣き出しそうな顔になり、ふらつく足取りで走り去っていった。
「何だよ、思った以上に腰抜けだなぁ……」
竜治は呆れたように呟くと、雪乃の方をチラリと見やり、背を向

けた。
「あ、あの、待ってください！！」
突然ありさが大声を出したので、雪乃は驚いて振り返った。竜治の足もピタリと止まる。
「あ、ありがとうございました！！」
髪が乱れるのも気にせず、ありさは思いきり頭を下げた。
竜治は少しだけ振り向くと、
「礼なら、そっちの嬢ちゃんに言ってやってくれ」
そう言って微笑み、軽く左手を上げて去って行った。
「……ドキドキしてる……」
惚けたようにありさが呟いた。
怖くてドキドキしているのか、それとも……雪乃に訊ねる勇気はなかった。

4．花火大会（8）

「黒羽さん、本当にごめんなさい……」
「私の方こそ、ついカッとなって、騒ぎにしちゃってごめんね……」
「ううん、ありがとう……嬉しかった……」
ありさは潤んだ瞳で微笑みながら言った。
「あのね……私、冬木瑠璃子の娘なの」
「へ？」
そう言われてもピンとこなかった雪乃は、間の抜けた声を出した。
「フフッ、やっぱり、知らないのね」
ありさは何だか嬉しそうに笑っている。
「女優なの。元はアイドルだったんだけど。それで私も、いろいろ出てたことがあって……」
「出てた？」
「うん。ドラマとか、ＣＭとか、舞台とか……」
「すごい……」
「ううん、何もすごいことなんてない……芝居は下手だし、根性はないし……あの人の娘だから、みんなチヤホヤしてくれたけど……」
「じゃあ、さっきの人も、前に視聴覚室覗いてた人たちも、冬木さんのファンってこと？」
「それはないと思う。だって、子役をやってたのはもうずっと前のことだもの……冬木瑠璃子の娘だから……珍しい動物を見るようなものよ」
「そんな……冬木さんは、そんなの関係なく、魅力的だもん……普通にモテてるだけだと、思うんだけど……」
「でもみんな、私のことなんて何も知らない……私がどんな人間かなんて、興味ないのよ。知って欲しいとも思わないけど。ただ、放っておいて欲しい」
心底ウンザリした様子で、ありさが言った。雪乃は何と言ってい

いのかわからない。
「……黒羽さんには、かまって欲しいけど」
そう言って、ありさは悪戯っぽく笑った。
「え？　かまって、欲しいの？　私に？」
「うん。黒羽さんに放っておかれたら、きっと、すごく寂しい」
どこまで本気なのかわからないけれど、雪乃は嬉しくて泣きそうになった。
「もう、無茶しないでね？　私のために、黒羽さんが怪我でもしたら、私、自分を許せなくなる……」
「……うん、わかった……出来るだけ、無茶はしないようにする……けど、私、実は、すごく気が強いの」
「うん、知ってる」
「そう見える！？」
「うん。私なんかより、ずっと強い人だと思う」
「そうかな……いろんな人に、甘えっぱなしだけど……」
いつの間にか暗くなっていた空に、最初の花火が上がった。
「あ、いい場所取れなかった……ごめんね、誘ったの私なのに……」
「ううん、ここで十分。人が少なくて、かえって落ち着いて見られるわ」
花火は時々建物の陰に隠れてしまったけれど、雪乃とありさはその場所で空を見つめ続けた。
「地面がビリビリいってる……」
「うん。この音も、花火の醍醐味だよね」
「ねぇ、黒羽さん」
「ん？」
「……雪乃ちゃん、って、呼んでもいい……？」
「え……う、うん！！　もちろん！！　……私も、ありさちゃん、って、呼んでもいい？」
「うん！！」
二人は肩を寄せ合いながら、最後の花火が消えるまで、夜空を見

つめ続けた。

4．花火大会（9）

「今日は誘ってくれて、本当にありがとう……すごく楽しい一日だった」
「私の方こそ、ありがとう……いろんなことあったけど、そう言ってもらえて嬉しい」
「……私ね、友達って呼べるような女の子、ずっといなかったの……だから、雪乃ちゃんと出会えて、本当に嬉しいの……これからも、仲良くしてね？」
「もちろん！！　私の方こそ、これからも、よろしくね」
「フフッ……ああ、もっと駅が遠ければ、もっと沢山お喋りできたのに……」
「また会えばいいよ。私、暇だし。冬木さ――ありさちゃんが誘ってくれたら、いつでもｏｋだよ」
「フフッ、本気にしちゃうから」
「どうぞ。ね、電車降りてから、家まではどうやって帰るの？」
「歩きよ。７～８分で着くから」
「ダメだよ！！」
「どうして？」
「どうして、って、危なすぎるよ！！」
「いつも通ってる道よ？」
「もう真っ暗だもん」
「いつもこれくらいの時間に帰ってる。習い事や予備校に通ってるから」
「じゃあ、いつも危ないんじゃない！！」
「大丈夫よ。防犯ブザー持ってるし。合気道習ってたこともあるし。そうだ、今度空手も習ってみようかな？　かっこいいでしょ、空手」
「もー、冗談じゃないんだから！！　世の中、変な人いっぱいいるんだよ？　バスは？　通ってないの？」

「通ってると思うけど……」
「じゃあ乗って。お願い」
雪乃の真剣な様子に、ありさも微笑みを引っ込め、コクリと頷いた。
「良かった……今日だけじゃなくて、これからはそうしてね？　あ、バス停から家までも、油断は禁物だよ？」
「わかったわ……大切にされてきたのね……」
「え？」
「何でもない」
ありさはいつものようにフフッと笑うと、手を振って駅の中に消えて行った。

「イイ子そうだな」
ありさと別れ、暗い道を一人で歩いていた雪乃は、突然後ろから声を掛けられて、ビクリと立ち止まった。
「もう！！　脅かさないでよね！！」
「じゃあ、どう声掛けりゃいいんだよ？　それとも、いきなり肩でも叩いた方が良かったってのか？」
そう言われると、何も言い返せない。
「……いつから後ろにいたの？」
言いながら雪乃が歩き出すと、竜治も歩幅を合わせて隣を歩く。
「ほとんど会場からだな」
理由はわかっている。こんなに遅い時間まで、雪乃が外を出歩くことは今までに一度もなかった。人気の無い夜の道を、娘一人で帰らせるのが心配という親心は、雪乃にだってわかる。
「大和と優は？　もしかして、二人だけに後片付けやらせてる？」
「いいや。若いモン何人かに手伝わせてるから、すぐ終わんだろ」
「そう……美味しかった、たこ焼き」
「そりゃそうだろ。世界一美味いに決まってる」
「それは自信過剰じゃないかな……イテッ」

突然、竜治の手が雪乃のオデコをはたいた。
「ぶつことないじゃん。暴力反対！！」
「そんなに力入れてねーだろ？　ツルピカのデコ、つい叩きたくなっちまったんだよ」
言われて雪乃はハッとした。

4．花火大会（１０）

「ヘアピン、返すの忘れちゃった……」
「借り物なのか？」
「冬木さ――ありさちゃんが、持ってきてくれたの。私の浴衣に合わせて」
「なら、くれたってことなんじゃねーのか？」
「そう、なのかな……そういえば、ちゃんとお礼も言ってない気がする……ああ、もう、私の馬鹿……」
本気で落ち込む雪乃を見て、竜治はフッと鼻先で笑った。
「あ、バカにした！！」
「してねーよ……ただ……ママのこと思い出してな……お前はほんと、ママによく似てる……気の強いとこも、正義感の強いとこも、そのデコも」
「……オデコ、似てるかなぁ……」
「ああ、そっくりだ。出会った頃のママは、デコ全開だったからな。つるっつるの、剥き卵みたいなデコだった」
「……可愛かった？」
「ああ。世界一可愛かった」
「世界一ばっか」
「いいじゃねーか。ほんとのことなんだから。今は、お前が世界一可愛い」
そう言って、竜治は雪乃の肩をギュッと抱き寄せた。
「やめてよ、気持ち悪い！！」
「ウソつけ。嬉しいくせに」
「バッカじゃないの？　もー、暑苦しい！！」
口ではそう言いながら、雪乃は竜治の腕から本気で逃れようとはしなかった。
「……お前は正しいことをしたよ。お前のそういうとこ、俺は大好

きだ」
　ふいに、真剣な口調で竜治が言った。
「けど、あんなこと、二度として欲しくねぇな……今日の相手は腰抜けだったからいいけどよ……いや、よくねぇな、俺が行かなきゃ、あのヤロウ、お前に手ぇ出してたに違いねぇ……クソッ、一発殴っときゃ良かったな」
「そんなことしたら、パパの方が逮捕されちゃうよ……」
「わかってる……とにかく、男ってのは、バカで、乱暴な生き物なんだ。ああいうことは、もうしないで欲しい」
「……ありさちゃんにも、言われた……けど、よくわかったね。お店からは見えなかったでしょ？」
「客が話してんのが聞こえてな。ご丁寧に、事の発端から噂話してくれやがった。見てたんなら助けろっつーんだよ。ったく、情けねぇ世の中だぜ」
　話を耳にし、店から飛び出していく竜治の姿が目に浮かぶようだった。
「……ありがとう、助けに来てくれて」
「あったりめーよ。お前のピンチには、必ず駆けつけてやる……けど、やっぱ無茶は禁止。いいな？」
「……わかった」
「よし。イイ子だ」
　そう言って、竜治は雪乃の髪をグシャグシャと撫でた。

　玄関の鍵を閉め、下駄を脱いで部屋に上がったありさは、灯りは点けずにそのままベランダに続く窓へと向かい、鍵を開けて外に出た。
　去年もおととしもその前も、この場所から、独りで花火を眺めた。
　高級マンションの十五階にある部屋のベランダからは、遮るもの

もなく、花火がよく見えた。けれど、今日見た、欠けてばかりの花火が、一番綺麗だった。
独りでベランダに立っているうちに、だんだんと寂しい気持ちが胸の中に広がっていった。
とても楽しかった日の最後には、寂しさがやってくるということを、ありさは初めて実感していた。それすらも、何だか嬉しかった。

薄暗い部屋の中で、テーブルの上に置いていった携帯電話のランプが点滅しているのが見えた。メールが届いているという合図だ。
『花火大会、どうだった？　誠人』
文面を見たありさの顔に笑みが浮かぶ。
『すごく楽しかった……今までで、一番。きっと、一生忘れない……。また、いっぱい話、聞いてね。　ありさ』
送信ボタンを押しながら、雪乃の笑顔と、名前も知らないヒーローの姿を、ありさは思い出していた。

4．花火大会（１０）（後書き）

「4．花火大会」は今回で終了です。

5．文化祭（1）

「おっはよー、雪のん。ひっさしっぶりー」
「あ、千波ちゃん、おは――」
廊下で弾むような声をかけられ振り向いた雪乃は、思わず口をポカンと開けたまま固まった。
「えへへー。実は、ハワイでバカンス三昧……なーんてわけないでしょ。そんなにビックリするほど黒い！？」
雪乃は口を開けたまま、コクリと頷く。
千波の顔、首、腕、指の先まで、見事にこんがりと日に焼けていた。
「毎日外で走り回ってたからね。日焼け止め塗るの、面倒だし……っていうか、ベタベタして気持ち悪くない？」
「うん、気持ち悪いよね……それに、ブツブツ出たりして痒くなるから、私も塗らないよ」
「えっ、塗ってないのにその白さ！？　もしかして、引きこもってた？」
「えへへ……」
「ったくもう……暑い中無理して外出ることはないけどさ、たまには身体動かした方がいいよ？」
「う……頑張る……あ、そうだ、おめでとう」
教室へ向かう途中、掲示板に夏の大会の結果が貼られていて、そこで初めて雪乃は千波の活躍を知ったのだった。
「ありがと。まだまだなんだけどね」
千波にお礼を言われながら、雪乃は後ろめたさのようなものを感じていた。
結局、千波の応援に行ったのは、ただの一度きりだ。こんなに日焼けするほど、千波は毎日懸命に練習している。友達なら、それを応援するのが当たり前だ。

それなのに、いつ大会があるのかすら知らなかった。考えてもみなかった。自分は何て薄情なんだろう……友達だなんて思う資格はないのかもしれない……。
「あの、千波ちゃん……ごめんね……」
「ん？　何が？」
「応援、行かなくて……」
「そんなこと気にしてるの？　“ここ”で応援してくれれば十分。……してくれてるよね？」
千波は、自分の胸の辺りをトントンと叩きながら言った。
「も、もちろん！！　本当にすごいな、って思ってる。私には、絶対に真似できないもん……記録とか、順位とかだけじゃなくて、一生懸命頑張ってるところ、本当に尊敬してる！！」
「あはは、誉めすぎ」
「ううん、私も頑張らなくっちゃって……千波ちゃん見てると、恥ずかしくなる……」
「もーおしまい。誉めてもらえるのは嬉しいけどさ、あたしだって、そんな立派なもんじゃないって……これしかできないんだよ、あたしには……」
そう言って千波は笑ったけれど、いつもの笑顔とは少し違うような気がした。もしかして、疲れているのかな……雪乃はそう思ったけれど、口にするのはやめておいた。千波はそんなこと、言われたくないだろうと思ったからだ。
「そういえばさ、今月は文化祭があるんだよね～。クラスの出し物、なんになるんだろ。楽しみ～。あ、聡美発見。じゃあ、またね、雪のん」
千波はいつもの笑顔で軽く手を振ると、聡美のもとへと走って行った。
「文化祭か……」
ほとんどの生徒が楽しみにしているのだろうけれど、雪乃は少し気が重かった。小学校の学芸会や、中学校の合唱コンクールのよう

に、きっとクラスの輪に入れないまま、他人事のように眺めているだけだろうから。

「雪乃ちゃん」

小さく溜め息を吐いた雪乃は、思いがけず名前を呼ばれて驚いた。

5．文化祭（2）

「ありさちゃん……」

ありさはまだ鞄を持っていた。自分の教室に行く前に、雪乃のところに寄ったらしい。

夏休み前まで、ありさと会うのはあのベンチのところと決まっていた。まるで人目を忍んで逢瀬を重ねる恋人のようだと、ありさが笑って言ったことがある。こんな風に、人が沢山いるところで会うのは初めてだった。

「結局、あれから会えなかったから……新学期が待ち遠しかった」

「うん、私も。……あ、そうだ、あの、ヘアピンなんだけど……」

「ああ……あれは雪乃ちゃんにあげたものなの」

「え？　あ、ありがとう！！」

「気にしないで。私がお揃いにしたかっただけなんだから」

ありさはフフッと笑ったけれど、すぐにその笑いを引っ込めてしまった。

廊下を行く生徒たちが、チラチラとこちらを見ていることに雪乃は気づいた。あちこちの教室のドアや下窓からも、いくつもの顔が覗いている。

「……もう、行くわね。また、お昼始まったら、一緒に……」

「うん。チョコバナナ持ってくるね」

「ほんと？　楽しみ」

一瞬だけありさは笑い、逃げるようにその場を立ち去った。野次馬たちは、怪訝な顔で雪乃の方を見てから、何事もなかったかのように散っていった。

普通、人は他人のことを、あんな風にあからさまに観察したりはしない。それがとても失礼な行為であると、わかっているからだ。

ありさがただの美人ならば、あそこまで好奇の視線を浴びせられることはないだろう。やはり、有名な芸能人の娘であるから……だ

からといって、あんなに不躾な行為が許されるのだろうか。
小学校や中学校で雪乃の家のことがバレた時、同級生たちは、雪乃の方を見ようともしなくなった。思いきって話しかけた相手には、「ごめんなさい」と訳もなく謝られた。
それはやはり辛いことだったけれど、もし、ありさのように、不気味な視線をあちこちから浴びせられ続けていたらどうだったろう……雪乃は想像して、溜め息を吐いた。

5．文化祭（3）

始業式が終わった後のホームルームで、早速文化祭の出し物を決めることになった。一部の生徒の熱いやりとりの後、多数決が取られ、占い&手品喫茶をやることに決まった。

「では、男子は全員手品、女子は全員占いを勉強してください」

委員長である葛城典子の言葉に「えーっ！？」という非難めいた声が沸きあがる。

「全員じゃなくてもいいじゃん。そもそも喫茶店だろ？　接客とか裏方とかもいるじゃん。ってか、そっちのがメインじゃね？」

「全員が対応できるようにしておけば、運営がスムーズに行くでしょ？」

「別に担当しっかり決めとけばいいじゃん」

うんうん、と雪乃は心の中で必死に頷いた。裏方――食器を洗う係なら雪乃にもできそうだったけれど、それ以外は絶対に無理だ。笑顔で接客したり、ましてや占いをするなんて。

様々な意見の応酬の後、結局役割を分担することに決まった。

「っていうかさ、なんで手品は男子で占いが女子って決まってるわけ？」

という女子の一声で、やりたい人が自由に立候補できることになったのだが、典子が挙手を求めても、誰一人手を挙げることはなかった。

「ちょっと、誰かがやってくれないと困るんですけど。っていうか、やりたいんだよね？　手品と占い」

苛々した様子で典子が言う。消去法で手品&占い喫茶に仕方なく一票を投じた雪乃は、少しだけ責任を感じて俯いた。

「だったら普通の喫茶店にしますか？」

「それだったら、他のクラスとかぶんじゃね？」

「だったら誰かやってよ！！」

「委員長がやれば？」
「……やるわよ。手品でも占いでも……いいわ、両方やるわ。でも私ひとりがやったってしょうがないでしょ？　他に誰かやってくれませんか！！」
明らかに怒った口調で典子が言う。
教室内は静かになり、重苦しい空気が漂い始めた。
「……あたし、手品やろっかな。あー、でも手先ブキだからなー。やっぱ占いにしときまーす」
元気良く手を挙げて千波が言った。
「……ありがとう、須藤さん」
数十分振りに典子に笑顔が戻る。
「他に誰かやってくれる人はいませんか？」
どうしよう……と雪乃の鼓動が速くなった。千波は、別にやりたくて手を挙げたのではないと思う。やりたいのなら、こんな嫌な雰囲気になる前にさっさと手を挙げていたはずだ。
はぁ……と典子が大きな溜め息を吐いた。
「誰もいないようなので、公平にくじ引きで――」
「あ、あの……」
雪乃はおずおずと手を挙げた。クラスメイトが一斉に振り返る。その顔はどれも、驚いたようにきょとんとしていた。
「……何か、質問でも？」
軽く眉根を寄せながら、典子が言った。雪乃が立候補するとは、はなから思っていないらしい。
「あ、あの、私……私も、やります、占い……」
思わず立ち上がって、雪乃は答えた。最後の方は、消え入りそうな声だった。
ざわつく教室のどこかから、「ってか、あいつ誰だっけ？」という男子のとぼけた声が聞こえてきた。
小学生の頃から雪乃は、極力目立たないよう学校生活を送る癖がついていた。さすがに女子の中には、雪乃の存在を認識していない

生徒はいなかったけれど。
「あいつ、さっき冬木ありさと話してた」
「マジで？　知り合い？」
「わかんねーけど、結構仲良さそうだった」
文化祭とはまるで関係のない話題も混ざり始める。
雪乃は座るタイミングを逃したまま、おろおろし始めた。今すぐ教室から逃げ出したい気分だった。
「静かに！！　静かにしてください！！」
典子は声を張り上げたが、一部の生徒はお喋りをやめる気配がない。と、典子は教卓の端を掴んで持ち上げ、何度か床に叩きつけた。
「……怖ぇ、あいつ……」
半ば呆気にとられるようにして、生徒たちは静かになった。
「占いをやってくれるんですか？　黒羽さん」
「は、はい……頑張ります！！」
「ありがとう。では、これで占いは三人に――」
「オレもやる」
手を挙げてそう言ったのは、井上雄太だった。いつぞや、雪乃にボールを当てて怪我をさせた男子の一人だ。
「ありがとう、井上くん……他に手品をやってくれる人は？」
「あー、オレ、占いの方に手挙げたんだけど……」
「……そう。じゃあ、占いの方はこれで四人なので、締め切りとします。あとは手品と――」
「もう手品はよくない？　だって、できる奴いんの？」
「……じゃあ、占い喫茶でいいと思う人？」
典子の言葉に、クラスの大半が手を挙げた。それでいいと言うよりも、早く終わらせたいという気持ちの方が強そうだった。
「わかりました。それでは、占い喫茶ということで。もう変更はしませんから。じゃあ、次はメニューを決めます」

5．文化祭（4）

「ありがとね、雪のん」
ポン、と後ろから、千波に両肩を叩かれた。
「あ……ううん、私もやってみたかったの」
まるっきり嘘というわけでもない。千波と一緒ならやれる気がしたし、千波と一緒なら、楽しい思い出が作れるような気がしていた。
「ほんと？　もしかして雪のん、占いできたりする？」
ううん、と雪乃はかぶりを振った。
「そっか。じゃ、一緒に勉強しよう」
「うん！！」
「……オレも、全然わかんないんだけど」
「井上……何でできもしないのに手なんか挙げるわけ？」
「は？　お前らだってできないっつってたじゃん、今」
「……まあ、そうだけど。じゃ、とりあえずさ、誰が何の占いやるか決めない？　あたしはタロットがいいなー」
「オレ手相！！」
「却下」
「なんでだよー」
「動機が不純だからに決まってんでしょ？　どーせ女の人の手を触りまくりたいだけなんでしょーが」
「人をヘンタイ扱いすんなよな……手相なら簡単そうだって思っただけだよ……」
「……確かに、あんたの頭でタロットカードの意味覚えるのは無理そう」
「須藤の頭も大差ないと思うけど……」
「なんか言った？」
雄太は少し怯えたように首を振った。
「ねえ、千波ちゃん、タロットカードの意味覚えるのって大変なの

？」
「そうよ。カードは全部で二十二枚。それぞれにいくつもの意味があって、しかも正位置と逆位置で意味が変わってくるの」
千波が答えるより先に、いつの間にか立っていた典子が答えた。
「私、タロットの知識なら多少はあるの。趣味で時々やってるから」
その場にいた全員が、何故かささやかな恐怖を感じた。典子のタロットは、何だかものすごく当たりそうな気がする。それも悪いことが。
「いろんな占い考えてみたんだけど、結局のところ、人が集まりそうなのはタロットと手相くらいじゃないかしら。四人しかいないことだし、二人ずつにわかれましょ」
有無を言わさぬ口調で典子が言った。
「須藤さんはタロットがやりたいのよね？　黒羽さんは？」
「え？　あ、えっと……」
「タロットの意味を記憶する自信があるんならどうぞ。でも、手相の方が覚えること少ないと思うけど」
タロットカードをやりたい、なんて言ったらキレられそうな口調だった。本当は千波と一緒に勉強したかったけれど、覚えられなかった時のことを考えると恐ろしくもなった。
「……手相、やります……」
そう答えると、千波は少しがっかりしたようだった。

5．文化祭（5）

「お嬢、お風呂どうぞ」
バルコニーと二階の廊下を隔てる扉から、大和が顔を出して言った。
「うん。ありがと」
雪乃は今まで読んでいた本を閉じ、立ち上がる。
「何、読んでたんです？」
「手相占いの本。簡単そうだって思ってたんだけど、ちゃんと覚えるのはちょっと大変そう……間違ったこと教えるわけにいかないし」
「覚えるとか教えるとか……占い師にでもなるんですか？」
「えーと……ドア、閉めて」
大和は小首を傾げながらも、言われた通りに扉を閉め、バルコニーに出た。
「こっち、来て」
バルコニーの隅で雪乃が手招きする。
「……内緒話ですか？」
「うん……実はね、文化祭で、手相占いやることになって……」
「なんだ……何かもっと重要なことを打ち明けられるのかと」
大和は安心したように息を吐いた。
「だって、パパに聞かれたくないもん。絶対余計な首突っ込んでくるし、面倒くさいことになるに決まってるもん」
「そんな言い方したら可哀相ですよ……ちなみに、竜治さんは文化祭の日程は知ってますけど」
「ええっ！？」
「ええっ！？　って、お嬢、四月に年間行事の日程表渡したじゃないですか」
「そうだった……」
「そのうち、話が出るんじゃないですか？」

大和の言葉は、二日後に現実になった。

5．文化祭（6）

「なあ雪乃、文化祭、遊びに行ってもいいか？」
「……ダメ、って言ったら来ない？」
「……言うのか？」
いつになく弱気な態度で竜治が言った。きっとそれも作戦に違いない、と雪乃は思う。
「あ、お嬢、骨に気をつけてくださいね。優も」
今日の夕飯は秋刀魚だった。大和は恐ろしく綺麗に魚を食べる。皿の上には、レントゲン写真のような骨だけが綺麗に残る。竜治と優はいつもグチャグチャだ。
「俺には刺さってもいいのか……」
「竜治さんはもう立派な大人ですから。言われなくても自分で気をつけてください」
大和に言われ、竜治はますますしゅんとなる。
「いいんだ、俺なんて、喉に骨が刺さればいいんだ……どうせ娘の文化祭にも行けやしねぇんだから……」
雪乃は大きな溜め息を吐いて箸を置いた。
「もう、いい加減にしてよね。大体ね、普通は親なんて来ないよ？」
「……ボク行ってみたいな」
優がポツリと言う。三人は一斉に驚いた顔で優を見つめた。
「……でも、優は修学旅行だよね？」
「はい。だから、行けないんですけど……あ、どっちにしても行っちゃいけないんでしたっけ……」
「優はいいよ！！　来年来ればいいよ、ね？」
「なんだ、その差別は？　大和はどうなんだ？　いいのか？　ダメなのか？」
「大和は……いいよ」
竜治は大袈裟にガックリとうな垂れ、勢いあまってテーブルにオ

デコを打ちつけた。
「いってぇ……ああ、もうやめやめ！！　弱ったフリして雪乃の同情心に訴えかけよう作戦は中止だ！！」
「やっぱり……」
雪乃は呆れたように呟き、何度も首を横に振った。
「お前のクラスには行かねーって。E組……だよな？」
「……だったら何しに来るわけ？」
「何しにって、文化祭の雰囲気を楽しみに、に決まってんだろ？」
「だったら他の高校の文化祭行けば？」
「なんでわざわざ他所の高校行かなきゃなんねーんだよ」
「いいじゃないですか、お嬢」
珍しく、大和が口を挟んできた。
「どんな雰囲気の学校か、見てみたいんですよね？　竜治さん」
「……親としちゃあ当然だ」
「だから、高校生にもなって、そんなに過保護な親なんていないって」
「過保護なもんか。全っ然足りないくらいだ。うちは普通の家じゃ――」
言いかけて、竜治は「しまった」という顔をした。この家で、雪乃や優の前で、組の話は一切しないというのが暗黙のルールになっている。竜治は危うくそれを破るところだった。
「ねえお嬢、今回は折れてくれませんか？　お嬢に迷惑はかけないって、俺が約束しますから。ちゃんと見張っときますから」
「……お前、いつからそんなに偉そうになったんだ？」
怒った風ではなく、むしろどこか嬉しそうな顔で竜治が言う。
大和がそんな風に頼んでくるのは珍しいことだった。雪乃も承知せざるを得ない。
「……わかった。けど、お願いだから、目立つようなことはしないでよ？　そもそも、目立つ格好で来ないでよ？」
「任しとけって！！　休日のお父さん、って感じで行きゃあいいん

だろ？」

何だか少し嫌な予感がしたが、雪乃はそれ以上何も言わなかった。

5．文化祭（7）

雪乃には大きな気がかりがあった。
ありさのことだ。ありさはまだ、竜治のことを覚えているだろうか？　あれから話題に上ったことは一度もないけれど、だからと言って忘れているとは限らない。もし忘れていたとしても、見た瞬間に思い出す可能性は大きい。
「雪乃ちゃん、ごめんね、待った？」
「ううん、平気。じゃーん、チョコバナナ持ってきたよ」
雪乃は容器の蓋を開けてありさに見せた。一口大に切ったバナナがチョコにくるまれ、カラフルなスプレーチョコで飾り付けられている。もちろん、作ったのは大和だ。
「わぁ……美味しそう……ありがとう」
「うん。早くお弁当食べて、これ食べよ」
「うん！！　……あ、ねぇ、雪乃ちゃんのところは文化祭の出し物決まった？」
「うん、始業式の日に決まったよ」
「すごく張り切ってるのね……うちはやっと決まったんだけど……」
「……どうしたの？」
「別に何やろうと関係ないんだけど、くだらなすぎて……」
ありさは苦笑しながら、サンドイッチを一口齧った。
「フィーリングカップルだって」
「フィーリング……？」
「昔、そういう番組があったのよ。私たちの親世代か、もしかしたらもっと上の世代かも……集団お見合いっていうか、今で言ったら合コンみたいな感じかしら」
「それは、なんか、大変そうだね……」
「まあ、私は休むつもりだから、関係ないんだけどね」
「えっ？　休んじゃうの！？」

「困る？」
「うん、困る！！　っていうか、寂しい……」
「フフ、嬉しい……雪乃ちゃんのところは？　何をやるの？」
「占い喫茶。手相と、タロットカードでね、私、手相をやるの」
「雪乃ちゃんが？　すごい！！　……じゃあ、私も見てもらおうかな？」
「うん！！　頑張って勉強して、ちゃんと見られるようになるから、だから……」
「うん、休むのやめるわ」
「ほんと！？　やったー」
ありさが休めば竜治と鉢合わせする心配はなくなるけれど、それよりも、ありさと一緒に文化祭を過ごすことの方が、雪乃にとってはずっとずっと大切なことだった。

5．文化祭（8）

「これが人気線、これが金運線、これが……」
「雪のんは真面目だねー。わかんなくなったら、コソッと本見ちゃえばいいんだよ」
「なんかドキドキしてきちゃった……どうしよう千波ちゃん！！」
「大丈夫だって。適当でいいの、適当で。相手が喜びそうなこと、適当に言っとけばいいんだって。向こうだって、こんなのお遊びだってわかってるって」
「千波ちゃん……」
千波の、良く言えばまったく物怖じしないところが、雪乃は心底羨ましかった。
確かに、素人の、しかも女子高生が文化祭でやる手相占いを本気で信じる人なんていないかもしれない。雪乃自身も、占い自体をあまり信じている方ではない。けれど、やるからにはちゃんと真面目に、というのが雪乃の性格だった。
「ね、あたしで練習してみる？　とか言って、ほんとは見てほしいだけだったりするけど」
千波は正面の椅子に座り、左手を差し出した。
「じゃ、じゃあ、見させていただきます」
「お願いしまーす」
まずは生命線を見た雪乃は、眉根を寄せて首を傾げた。
「……な、何！？　なんかマズイことでも！？」
生命線を横切るくっきりとした線がある。本に書かかれていることが正しいのならば、千波は二十歳になる前に、大きな怪我、あるいは病気に見舞われることになる。
「……生命線、太くて長くて力強いから、心配ないと思う……ただ……」
「……ただ？」

「怪我とか病気とか、気をつけた方がいいみたい……ほら、ここ、横に線が入ってるでしょ？」
「ほんとだ……けど、怪我はつきものだから。いつものちょっとした怪我のことだよ、きっと」
「う、うん！！　そうだよ！！　それに、気をつけろ、ってサインだから、気をつければ大丈夫なんだよ。手相は変わるっていうし……」
縁起でもないことを言ってしまったと、雪乃は少し後悔した。
「ね、雪のんも占ってあげようか？」
「え……うん、じゃあ、お願い……ちょっと怖いけど」
あまり信じてはいないものの、やはり悪い結果が出れば気になってしまう。
「何占って欲しい？　恋愛？　将来のこと？　それとも恋愛？」
「千波ちゃん……」
雪乃が苦笑する。
「好きな人のこと思い浮かべながら、こんな風にかきまぜて」
千波が見せてくれたように、雪乃はカードをグルグルとかきまぜた。もちろん、頭の中には誠人の姿を思い浮かべながら。
それを、千波は手際良く配置していく。
「おおっ、なかなかいいカードが出ましたよ……近いうちに幸せなことが起きそう」
「ほんと！？」
「うん。この位置は近い未来を暗示してるんだけど、このカードはね、発展を意味するの。つまり、その人との関係が、一段階、もしかしたら何段階も進んじゃうかも」
偶然そんな配置になったのだとわかっている。わかっていても、雪乃は頬が緩むのを抑えられなかった。
「あー、でも、遠い未来には、いろいろと困難がありそう……」
「えっ……」
「だけど、悪いカードじゃないよ――」

「二人とも悪いけど、そろそろお客さん来る時間だから、準備してくれない？」
「あ、のりぴー……じゃなかった、わかりました、委員長！！」
千波が右手で敬礼すると、典子は少しムッとした様子でその場を去って行った。
「のりぴーって呼ぶと怒るんだよね……」
小声で言って笑いながら、千波がカードを片付け始める。
「あ、続きはまた今度ね」
立ち上がった千波に、雪乃は「うん」と頷いたものの、もう見てもらうのはやめようと思っていた。なんだかんだいって、本当は占いを結構信じちゃっているのかも……と思い苦笑する。
ひとり残った雪乃は、自分の左手をじっと見てみた。小さな“悲哀線”が無数に刻まれている。まだ短いこれまでの人生で、いくつもの悲しみがあったことを表しているらしい。
そしてその中に、ひときわくっきりとした線が一本引かれていた。場所は、過去ではなく、未来に……。
信じてなんかいない。手相なんて、ただの手の平の皺だ。けれど――。
「手相は変わるもの……なんだよね？」
右手の人差し指でその線を消すように擦りながら、雪乃は呟いた。

5．文化祭（9）

「……こんなところにいた」
「誠人……来るなんて一言も言ってなかったじゃない」
「びっくりした？」
しょうがないわね、というように軽く首を振って、ありさは微笑んだ。
「……ひとり？」
「もちろん」
知らない人間と会うことが、ありさにとっては苦痛になることを、誠人は十分承知していた。だから、友達を引き連れてくるようなことはしない。
「こんなところにいていいの？　クラスの仕事、手伝わなくて大丈夫？」
「大丈夫。私は最初から勘定に入ってないもの。何の仕事も割り当てられてないの。いたらかえって邪魔よ」
特に寂しそうな様子でもなく、ありさは平然と答えた。
「そっか……じゃあ、案内してもらえる？」
その言葉には即答せず、少し目を泳がせる。連れ立って歩いて、おかしな噂でも立てられたら困ると思っているのかもしれない、と誠人は思った。けれど、こんなつまらないところに、ありさを独り置いておくのも嫌だった。
「……友達が、手相占いやってるはずなの。行ってみる？」
友達、という言葉がくすぐったいのか、少し恥ずかしそうにありさが言った。
「雪乃ちゃん、だね？」
誠人が言うと、ありさの顔に笑みが広がる。
「待って……」
言って、誠人は鼻から大きく息を吸い込み、口からゆっくりと吐

き出した。
「なんか緊張しちゃうな……ありさの初めての友達だからね」
「やめて。誠人が緊張してたら、雪乃ちゃんだって緊張しちゃうじゃない。それに、正確には、初めての“女の子の”友達。私の初めての友達は誠人でしょう？」
「……そうだね」
誠人は少し苦笑する。ありさにとって自分は、どこまでいっても“友達”らしい。
「雪乃ちゃんも私と同じで、多分、初対面の人は苦手だと思うから……怖がらせないようにしてね？」
「わかってるよ。ありさの大切な人だからね、嫌われないようにしなくちゃ」

「あ、雪のんだったら、お昼休憩に入って今いないけど……」
教室の中をおずおずと覗いているありさに、千波が声をかけた。
「……って、綾瀬くん？」
「須藤さん。久しぶり……でもないか」
「なんで綾瀬くんが……なんて訊くのはヤボか」
へへッ、と意味深な笑いを浮かべながら、千波はその場を去って行った。
「なんか、誤解されちゃったかな……」
誠人の言葉が聞こえているのかいないのか、ありさは小首を傾げて考えをめぐらせているようだ。
「もしかして……ごめん、誠人、ちょっとここで待っててくれる？」
「えっ……」
誠人の返事を聞く前に、ありさは走り出していた。
「……ほんと、雪乃ちゃんに夢中なんだな……」
羨ましいよ……と誠人は心の中で呟いた。

いつもの場所に、雪乃はいなかった。

今度は自分の教室に向かって走る。友達の姿を捜して校舎を走り回ることが、ありさは何だかとても楽しかった。

5．文化祭（１０）

雪乃はありさの教室のドアのところで、ポカンと口を開けたまま立ち尽くしていた。
五人ものお客さんの手相を見たこと、それがどんなにドキドキすることだったかを、一緒にお昼を食べながら、ありさに聞いてもらおうとやってきたのだった。
教室の中では、次のフィーリングカップルに向けて準備がされているところだった。
五つの椅子が二列、適度な距離を開けて互いに向き合うように並べられている。その一番端、雪乃から見て一番遠い椅子に、ちゃっかり竜治が座っていたのだ。
「何やってんの……っていうか、何あの服装……」
泣きそうな顔で雪乃は呟いた。
「休日のお父さんじゃなくて、ただのゴルフ場にいるオジサンじゃん……」
左胸にカラフルなパラソルのマークがついた黒のポロシャツの裾を、白っぽいスラックスにきっちり入れてベルトをしている。
「ダサすぎる……もはや犯罪だよ……」
せめてもの救いは、髪を七三に分けていないことくらいだった。
「って、問題はそこじゃなくて……いや、それも十分問題だけど！！」
「……どうしたの？　さっきからずっと独り言言ってる」
いつから隣にいたのか、ありさがフフッと笑っている。
「ああっ、あ、ありさちゃんっ！！」
「うん。雪乃ちゃんの教室に行ったら、お昼に出てったって言われたから、もしかしたらって……」
言いながら、ありさの視線が教室の中へと注がれる。
「ああっ、そ、そうなの！！　あ、ありさちゃん、お、お昼食べた

かなーって！！」
　雪乃はありさの前に周り、その視線を遮ろうとした。けれど、遅かった。
「ねえ……まさか、とは思うけど、あそこにいる人……」
　ありさの視線は、まっすぐ竜治に向けられている。
「……そ、そうみたい……私も、びっくりして……でもさ、見てよあの服！！　フッションセンスなさすぎの、ただのダサイおじさんって感じじゃない！？」
　冷静な時であれば、友達が気に入っている相手の服装を貶すようなことはしないはずだ。けれど今の雪乃にとっては、ありさの心から竜治への関心をなくすことが最優先事項だった。
「……確かに……」
「そ、そうだよ！！　ほら、よく、ゲレンデで出会った時はかっこよかったけど、後日街で会ったらガッカリ、みたいな話聞くじゃない！？」
「……でも、服装さえ除けば、やっぱり素敵だと思うの……」
　なんで七三で来てくれなかったのよ！！　と、さっきとは正反対のことを雪乃は思った。
「で、でも、よく考えて！！　あんなところに座ってるんだよ？　フィーリングカップルだよ？　しかも高校の文化祭だよ？　単なるロリコンのエロオヤジじゃん！？」
　放った言葉がそのまま自分に返ってきて、雪乃はダメージを受けた。よりにもよって自分の父親が、ロリコンのエロオヤジだなんて……。
「……そうね……私、参加できるか聞いてくる」
「うん……ええっ！？」
　てっきり竜治に興味をなくしてくれたのかと思った雪乃は、教室の中でクラスメイトと話しているありさの後姿を呆然と見つめていた。
「えっ、えっ、なんで！？　なんでそうなるの！？」

ありさはフィーリングカップルのようなノリが大嫌いなはずだ。仮にもっとまともな出し物だったとしても、自分から積極的に参加するなど考えられない。それなのに、そこまでして、竜治と知り合いになりたいということなのか……。

ふいに視線を感じ、雪乃が見ると、申し訳なさそうな顔をした大和が立っていた。竜治のことで頭がいっぱいで、大和の姿は今まで目に入っていなかったらしい。

大和はいつもと変わらず、黒いシンプルなシャツにジーンズというごく普通の格好をしていた。もちろん、シャツの裾をジーンズの中にいれたりはしていない。

何故だかホッとした雪乃は、教室の内外のあちこちから、大和に関するヒソヒソ声が聞こえてくるのに気がついた。

「ねぇ、あの人ヤバくない？」「モデルかな？　芸能人かな？」「わかんないけど、参加すんのかな？」「えー、だったらあたしも」……どの声も好意的なものばかりだった。

確かに、大和はものすごく目立つ。家の外で見ることはほとんどないけれど、こうして他の人たちの中にいると、群を抜いて見た目が良いのだということがよくわかる。もし優も来ていたら、もっと大騒ぎになっていたんだろうな……と雪乃は思った。

「参加させてもらえるって！！　私、頑張るから……応援しててね、雪乃ちゃん」

戻ってきたありさに両手を握られ、雪乃は戸惑いながらも頷くしかなかった。

フィーリングカップルが始まるまでの五分余りの間に、ありさが参加するという情報が校舎中を駆け巡ったらしい。あっという間に、廊下に男子の長い列ができてしまった。

参加できるのは五人まで、と最初から決まっているのに、彼らは納得しない様子だった。教室のドアのところで、ずっと押し問答が続いている。

「うわぁ……すごい人だなぁ……まったく、なんだってこんなもの

に参加することになったんだ？」
後ろから聞こえてきた独り言に、雪乃は何気なく振り返った。そして、心臓が止まりそうなほど驚いた。実際に、一瞬止まってしまったかもしれない。

5．文化祭（11）

そしてその心臓は、今度は壊れてしまいそうなほどの速さで動き出す。

大きく目を見開いて、口をポカンと開けている雪乃に、誠人は優しく微笑んだ。雪乃は頭が真っ白になって、そのまま後ろに倒れてしまいそうになった。

「あ、危ない！！」

咄嗟に両腕を掴まれる。

「……脳貧血かな？　大丈夫？」

何か言わなければ……と気持ちばかりが焦り、雪乃は魚のように口をパクパクさせた。

「人の少ないところで休んだ方がいいんじゃないかな？　それとも、保健室に行った方がいい？　場所、教えてもらわないといけないけど」

そう言って、また微笑む。顔が熱い。全身の血が頭に集まってきて、ガンガンする。

間近で見る誠人は、本当に優しい目をしていた。そしてその目は、どこまでも澄んでいて、キラキラと輝いていて……吸い込まれそうになり、雪乃は慌てて目を逸らした。

「あっ、あの、だっ、だいじょう……」

「はいはい、ちょっと通してくださいよ。はい、ごめんねー、通してちょうだいねー」

何とか声を絞り出していた雪乃の耳に、聞き慣れた声が届いた。雪乃のいる方とは反対側のドアから、竜治が出てきたところだった。

ふいに竜治と視線がぶつかった。竜治は雪乃の顔を見て、それからすぐに誠人の顔、そしてその手に視線を移した。

誠人の両手は、相変わらず雪乃を支えたままだ。見られた……と思った雪乃は、咄嗟に誠人の身体を突き放し、その場から走り去っ

てしまった。

「誠人……ごめん、行きましょう」

雪乃が去ってすぐ、教室からありさが出てきた。

「ああ、うん……でも、いいの？　なんかすごい殺気を感じるけど……」

数十人の男子の視線がすべて、誠人に鋭く突き刺さっていた。

誠人の言葉にありさは大きな溜め息を吐くと、早足で歩き始めた。慌てて誠人もついていく。

人の少ない場所まで来ると、ありさはもう一度溜め息を吐いた。

「何やってるんだろ私……」

「何やってたの？」

誠人がおかしそうに笑う。

「笑うわよね……あんなものに参加しようなんて馬鹿みたい」

「いいんじゃない？　たまには馬鹿になってみるのも」

「じゃあ誠人、参加してみたら？」

二人は顔を見合わせてクスクスと笑った。

「……あの子、大丈夫かな……」

「あの子？」

「うん。ちょっと具合悪そうだったんだ。休めるところまで連れて行こうと思ったんだけど、突然走っていなくなっちゃって……追いかけようと思ったら、ありさが出てきたから」

「走れるんだったら大丈夫じゃない？」

「うん……そうだよね」

「……心配？」

「心配っていうか……どこかで会ったことがあるような気がするんだけど……」

「ファンの子じゃないの？　それとも……一目惚れとか」

「そんなわけないだろ？　僕は外見で人を好きになったりはしない……って、説得力ないかな……」

「何？」
「なっ、なんでもない……」
ありさがどうして“馬鹿になった”のか、誠人には見当がついていた。
ずっと好きだった人を、忘れようとしているのだ。けれど、そんなに簡単に、思い通りに心を変えられるわけがない。
ありさは今もその人のことを想っている。決して叶わぬ恋だというのに。
そしてそんなありさのことを、誠人はずっと想い続けてきた。

5．文化祭（12）

「ハァ、ハァ、ハァ……どうしよう……突き飛ばしちゃった……もうおしまい……」

とにかく謝らなければ……そう思うのだけれど、誠人の顔を思い出すと胸がドキドキして、身体が震え出してしまう。

「あれ……でも、どうして……やっぱり、ありさちゃんの知り合い……？」

確かあの時、なんでこんなものに参加することになったんだ、とか何とか言っていた気がする。

そこで雪乃ははたと思い出す。ありさを置き去りにしてきてしまったことを。ありさは、雪乃が応援しながら見ていると思っているに違いないのだ。

「どうしよう……とりあえず、戻ろう、うん……」

そこには誠人がいるかもしれない。雪乃は大きく深呼吸してから、ありさがいるはずの教室へと戻った。

教室の中では、どう見ても盛り上がっているとは思えないフィーリングカップルが行われていた。ありさの姿も、竜治と大和の姿もどこにもない。

「あ、あれ……もう終わっちゃったのかな……」

呟いて、そんなはずはないと思う。もしかしたら、ありさのせいで混乱が起き、さっきの回は中止になってしまったのかもしれない。

とりあえず、竜治が何事もやらかさずに帰ってくれて良かった……と安心したせいか、雪乃のお腹がグゥと鳴った。

ありさを誘うことは諦め、隣のクラスで独り焼きそばを食べ、自分の教室へと戻る。

「あ、お帰り雪のん……焼きそば食べたでしょ？」

「えっ！？」

「口に青海苔ついてるよ。いいなー、美味しかった？」

「うーん……普通、かな？」
正直、大和の作る焼きそばとは比べ物にならなかったけれど、きっと大和の焼きそばが美味しすぎるのだ。上に、黄身が半熟の目玉焼きを乗せてくれるし。
「あたしも食べてこよっと」
千波はそう言って、スキップをしながら教室を出て行った。
雪乃も鞄の中から歯磨きセットを取り出し、教室を出ようとした。
「あ、雪乃ちゃん。良かった、会えて」
声の方を振り向くと、ありさが立っていた。そして、そのすぐ後ろには、誠人が目を丸くして立っている。
「そっか……どこかで会ったことがあるような気がしたのは、ありさから聞いて想像していた雪乃ちゃんそのままだったからだ」
訳のわからないことを言って、誠人が笑った。雪乃は金縛りにあったように、ただその笑顔を見つめている。
「……さっき話してた子って、雪乃ちゃんなの！？」
「そうみたいだ」
「大丈夫！？　具合、悪いの？」
ありさが心配そうに顔を覗き込む。
「う、ううん、だ、大丈夫、だよ……」
「……青海苔？」
雪乃の口元を見て、ありさが小首を傾げた。そして「フフッ」と笑うと、ポケットからハンカチを出して、雪乃の口元を拭う。
「あっ、ダメだよ！！　汚れちゃう！！」
「洗えばすぐ落ちるわ」
「でも、ありさちゃんのハンカチに青海苔なんて……」
あまりに申し訳なさ過ぎて、雪乃は泣きそうな顔になった。
「本当に仲が良いんだね」
「あぁ、忘れてたわ……こちら、綾瀬誠人くん。向陽学園の一年生。子供の頃から、家族ぐるみの付き合いなの」
「よろしく。雪乃ちゃんのことは、ありさからいっぱい聞いてるか

ら」
「……よ、よろしくお願いします……っていうか、さっきはごめんなさい！！」
雪乃はギュッと目をつむり、勢いよく頭を下げた。
「そんなことしなくていいよ！！　全然気にしてないし……元気なら良かった」
「あ……ありがとうございました……」
「敬語で話さなくていいよ。同い年なんだし。それに、できれば友達になりたいな……駄目かな？」
「え……」
「突然そんなこと言ったら困っちゃうでしょ？　ねぇ、雪乃ちゃん……」
「あ、あの、私……」
心臓がずっとバクバクしっぱなしで、雪乃はまた倒れてしまいそうだった。
「とってもいい人なのよ。なにせ、雪乃ちゃんに出会うまで、私のただ一人の友達だった人なんだから。きっと雪乃ちゃんとも気が合うと思う。お互いに好きになると思うわ」
「僕はとっくに好きだよ、雪乃ちゃんのこと」
誠人のその言葉と笑顔に、雪乃の頭の中は再び真っ白になり、今度は本当に気を失ってしまった。

5．文化祭（13）

「あっ……良かった……」
ありさがホッとしたように微笑んでいた。
保健室のベッドに寝かされていることを理解するまで、雪乃は虚ろな目をきょろきょろと泳がせた。
そして何故ここに寝かされることになったのかを思い出し、一気に頭がクリアになる。
雪乃は勢いよく上半身を起こした。
「ゆ、雪乃ちゃん！？」
「ごめんね、ありさちゃん……迷惑かけちゃって……」
「そんなこと言わない。迷惑なんかじゃないよ。それより、気分は？」
「あ……うん、大丈夫……」
「でも、とりあえず測ってみて？」
ありさがずっと持っていたらしい体温計のケースを差し出した。
「さっきオデコ触ったら、少し熱かったから……顔も赤かったし」
顔が赤かったのは、明らかに別のことが原因だと思うけど……と心の中で呟きながら、雪乃は素直に体温計を受け取り、脇に挟んだ。
「……今、何時？」
「三時過ぎよ」
「えっ、もう？　早く教室に戻らないと……」
「大丈夫。須藤さんには話しておいたから。今日はもう帰りましょう。タクシー呼んでもらうわ。雪乃ちゃんのお家まで送ってから、私、帰るから」
ありさの言葉に、雪乃は一瞬硬直した。
「だっ、ダメだよ……平気だから！！　ひとりで帰れるよ！！　ほら、もうピンピンしてる！！」
体温計を挟んでいることを忘れ、思いきり腕を上に上げる。

「もう、計り直し」
「……うん」
体温計を挟み直しながら、雪乃は後ろめたい気持ちになった。ありさに送ってもらうのが申し訳ないからではなく、家のことを知られたくないという理由で拒むだなんて、友達といえるのだろうか……。
雪乃は二重に隠し事をしていた。暴力団の家に生まれたこと、そして、竜治が父親であること――前者は仕方が無いと思ってくれるかもしれない。けれど、後者を、ありさは許してくれるだろうか……。
ピピッと電子音がして、雪乃は我に返った。
「37度5分……」
「ほらやっぱり。早く帰って寝なくちゃ。タクシーが嫌なら、お家の人に連絡して迎えに来てもらう？」
「ううん、本当に大丈夫……ありがとう……ごめんね……」
「……わかったわ。じゃあ、せめて駅までは一緒に行かせて？　それは絶対に譲らないから」
「うん……あ、そういえば……綾瀬くんは？」
名前を口にするだけで、胸がドキドキする。ますます熱が上がりそうだ。
「先に帰ってもらったわ」
「えっ……ごめんね、私のせいで……」
「もう、謝るの禁止。それに、綾瀬くんって呼び方も禁止」
「えっ！？」
「嫌ってるのよ、誠人。自分の苗字」
苗字を嫌っているのは雪乃も同じだったけれど、誠人にも何か理由があるのだろうか……。
「誠人だって、雪乃ちゃんのこと名前で呼んでるでしょ？　って、それは私がそう呼んでいるからだけど。以前は“黒羽さん”って呼んでいたもの」

言われて雪乃は思い出した。そう、誠人は「雪乃ちゃん」と呼んでくれていた。ドキドキしすぎて、それを喜ぶ余裕なんてなかったけれど。

「誠人……くん……」

「うん。ねえ、今度三人でどこかに行かない？」

「え……」

「もっと話したい、って誠人が。もちろん、雪乃ちゃんもそうだったら、だけど……」

「……う、うん……」

もちろん雪乃だって、もっと誠人と話がしてみたい。もっと、というより、ちゃんと、だ。今日の自分はあまりにも酷かった。どうして大和や優と話す時のように、自然に話すことができないのだろう……。

「大丈夫。緊張する必要ないわ。さっきも言ったけど、この私が、気楽に付き合える唯一の人だったの。誠人の方は、私と違って友達も多いけどね。きっと雪乃ちゃんも好きになってくれる」

もう好きだよ……と思わず口から出そうになった。けれど雪乃は言えなかった。

またひとつ、ありさへの隠し事が増えてしまった。

5．文化祭（１４）

「お帰りなさい、お嬢」
「……ただいま」
心ここにあらずと言った様子で、雪乃はリビングのソファに座り、フゥ……と大きく息を吐いた。
「随分早いじゃねぇか」
竜治の言葉も耳に届いてないようだった。
帰り道、雪乃の頭の中は、ありさへの後ろめたさと誠人へのドキドキでいっぱいだった。いっぱいどころか溢れ出し、今は途方に暮れている。
「あ、あれだぞ、別に俺は積極的にあの場にいたわけじゃ……」
雪乃が黙っているのは怒っているからだと、竜治は思ったらしい。
「なあ、大和？」
「……はい。参加者がいなくて困っているというので……」
「大和に出てやれって言ったんだけどよ、死んでもヤダって言うし……お前の学校の子が困ってるんだ、ここはひとつ助けてやろうって気になるのが親心だろ？」
雪乃は宙の一点を見つめたまま、黙り込んでいる。
「別に本気で相手探そうとしてたわけじゃねーって。大体、高校生のお子ちゃまなんかと付き合ったって面白くもクソもねぇ。俺はその気になりゃ、大人のイイ女の一人や二人……」
「竜治さん」
話が良からぬ方向にそれていきそうなところを、大和の呆れまじりの声が制した。
「そうだ、肝心なこと忘れてねーか？　俺は結局のところ参加してねーぞ？　お前の友達のありさちゃんが突然参加するって言い出してよ、そしたら途端に男子どもが集まり始めた。モテんだなぁ、ありさちゃん。で、それなら俺が出る必要はねぇだろ、ってことで、

退散したわけだ」
　まるで良いことでもしたかのように、竜治は満足げに頷きながら言った。けれど雪乃は、相変わらず何の反応も示さない。
「……あーっもう、いつまで怒ってんだ……ははーん、わかったぞ？」
　突然竜治が意味ありげに笑う。
「……ラブシーン見られたから怒ってんだろ」
　その言葉に、雪乃の目が大きく見開かれる。
「なっ、なっ、なによっ、バカッ！！」
　雪乃は立ち上がると、ものすごい勢いでリビングを飛び出し、階段を駆け上がって自分の部屋にこもってしまった。
「……ありゃ、まさか図星だったとは……」
「いくらなんでも、あんなに人がいるところでラブシーンはないでしょう……」
「けど、あの反応は異常だぜ？」
「確かに……」
「……あいつに間違いねぇ」
「何がです？」
「ほら、いつだったか様子がおかしかったことあったろ？　陸上大会かなんか見に行って」
　あの時竜治は恋だと言い張り、大和は体調が悪いのだと思っていた。
「……まさか、その恋の相手が今日の彼だと？」
「ああ、そうだ。色恋に関しちゃあ、俺は女並みに勘が鋭いんだ。雪乃のやつ、なかなかやるじゃねーか」
「それが感想ですか！？　普通、年頃の娘のそういう話には、父親は怒り心頭って感じになるものなんじゃ……」
「そりゃあ相手によりけりだろ。見るからに健全爽やか美少年だったからな。いや、しかし、人は見かけによらねぇとも言うしな……まあ、様子見だな」

呑気どころか、どこか愉しそうな竜治に、大和は眉を顰めた。
今さらながら、雪乃には自分の知らない日々の生活があることを大和は思い知る。
どこの誰ともわからない男と雪乃が、自分の知らないところで知らない関係を築いているのかと思うと、大和は気が気ではなかった。
それは、嫉妬などの欠片もない、純粋な心配だったけれど。

5．文化祭（１４）（後書き）

「5．文化祭」は今回で終了です。
一気に掲載できなくてすみませんでした・・・ペコリ（ｏ＿＿）
ｏ））
次回の更新はまったくもって未定です。（ラストまでの流れは書き始めた時から決まっているので、途中で投げることはありません！！）
実は新たな趣味に目覚めてしまいまして・・・まだしばらくはそちらに夢中になっていることでしょう・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2161i/

幸せのカタチ

2010年10月12日03時22分発行